李嵩
註解改正月令博物筌　八月部　二

俳諧資料カード

年代	
編者（筆者）	③
書名	
備考	

（蔵内垣下）

八月部目録

△印あるハ能諸の季と持ものゝ

○養生の法。雨風の考。米の豊凶
○妙薬。季とゝ〻ゝ祭。其外人
家重宝のこゝゝ処々ゝ数多あ
るゆへ目録ハ一るとず

八月

卦 月支 調子 陰陽生 異名註 八 切

△白露節。七十二候 八三丁
△秋分中。七十二候 八三丁

日令

八月月ハ定つゝゝるゝ干支
のそゝまるゝゝゝ爰ゝあるむ

朔日

○衣服 八四丁
△天中節 八四丁

△八朔 八朔の賀
△田実の祝 △田実の節
△田面の祝 △田面の節
八四丁

△繪行器 八五丁
△絲雀 八五丁

三日

○生花式 八六丁
△三村祭 八六丁

○御馬叡覧 八六丁
△八朔梅 八六丁

△堺天神祭 八七丁

四日

○天壽の節 八七丁

△京都北野祭 八七丁

五日

△白象社 八八丁

十日
△敦賀祭 八ノ十
十一日
△司召 △定考 八ノ十
十三日
△和泉大鳥明神祭 九ノ十四
十四日
△待宵 △小望月 八ノ十四 △十四夜 九ノ十
十四日
△豊後八幡祭 十
△中秋節 八ノ十
△名月 △新月 △良夜 △良宵 △端正月 △三五夜
△名高月 △今宵月 △望月 △最中の月 △月見 △明月
△月こゝひ △今日の月 八ノ十一
△芋名月 △十五夜
△月の餘 ○狗宝 △国名月 △名月蝕 △名月量 △名月曇
十五日
△放生會 十五ノ
△山城八幡祭 十八ノ
十五日
△諸国八幡祭 △鶴岡祭 △誓願祭 △宇佐祭 △安の津祭
△とゝ祭 △豊前門司祭
△揖斐祭 十八ノ
十六日
△駒迎 △駒ひき △きゝ木の弱
△引分の駒 △宮門の弱 △ちゝのく駒 △上野の弱 △武蔵の弱 △穂坂の駒 十九ノ
十五日
△越野日念佛 十八ノ
十六日
△十六夜月 △宵不如 八ノ十
△立待 △居待 △伏待 △更待 十九ノ
十六日
△京都菅太神祭 九ノ
十八日
△京都御灵祭 九ノ

十八日
△伊勢名祭 八ノ十
十二日
△長崎苦薩祭 八ノ十
十八日
△京都西院祭 八ノ十
十四日
△筑前宰府祭 八ノ十

月令

此部ハ八月日の定まる一ヶ月のこゝに出る

△後彼岸 八ノ十三
△秋社日 八ノ十三
△京都死活杖祭 △死杖の祭 八ノ十
△釈奠 八ノ十
△礎 △樹衣 △綾巻 八ノ十
△衣打 △衣四手打 △きゝろ打 八ノ十
△毛見 八ノ十
△落水 八ノ十
△下りやな 八ノ十
△新穀 八ノ十

時令

此部ハ八月一ヶ月の時候をかゝるこゝに出す

△暴風 △毋分 八ノ九六ノ
△肌寒 △長夜 △そ寒 八ノ十
△や〜寒 △秋冬 △そゝろさむ 八ノ十
△長夜 八ノ十
△そろ汐 八ノ十

草木

此部ハ八月の草木を出す此のゝ中に三秋ハ用ひ来る也

△初紅葉　八ノ十
△新蓋草　八ノ十
△牡丹根分　八ノ十
△木槿花　八ノ十
△縷紅　八ノ十
△金剛草　八ノ十
△花むくれ　八ノ十
△草鳥頭　八ノ十
△紫苑　八ノ十
△宇治花園　八ノ十
△薄穂　△尾花薄　八ノ十
△狼地草　八ノ十
△紫蘇実　八ノ十
△烟草花　八ノ十
△貝母　△荷衣　八ノ十
△名の木散　八ノ十
△木芙蓉　八ノ十
△桂花　八ノ十
△檀特花　八ノ十
△おろしの花　八ノ十
△鳥頭　八ノ十
△刈萱　八ノ十
△月草　△青花　八ノ十
△滋賀花園　八ノ十
△はまぢの薄　八ノ十
△穀精草　八ノ十
△黄蜀葵　八ノ十
△藍花　八ノ十
△麥花　△麥の穂　八ノ十
△芦花　△あしの穂　八ノ十
△虞美人草　八ノ十
△つるそうり　△玄参　八ノ十
△木賊刈　八ノ十
△堀　八ノ十
△たつや引　八ノ十
△石榴実　八ノ十
△茴香実　八ノ十
△蔓荔支　△黄瓜　八ノ十
△種瓢　△ふくべ　八ノ十
△菱取　八ノ十
△茸菌　△茸　△松茸　△茸狩　△鮭　△初茸　△石茸　八ノ十
△鼠茸　△針茸　△榎茸　△滝茸　△椋茸　△平茸　△鬼茸　△紅茸　△菌くけ
△七夕の花　八ノ十
△項羽草　八ノ十
△龍膽　八ノ十
△菊萱　△名刈　△やぶ刈　八ノ十
△苦参引　八ノ十
△茶堀　八ノ十
△銀杏実　八ノ十
△通草　八ノ十
△王瓜　八ノ十
△眉豆　△ふくべ豆　八ノ十

△茸　△探茸　△浙茸
△舞茸　△椒茸　△蛇茸　八十丁
△天狗茸　△月夜茸
○栗　△榧　八十二丁
△松露　八十二丁
△中稻　八十三丁
△粟稗引　八十三丁
△貝割菜　八十三丁
△摘菜　八十三丁
△中稜大根　八十三丁
△間引菜　八十三丁
△菜種蒔　八十三丁
△胡麻刈　八十三丁

種植

△芥子蒔　八十三丁
△大根まく　八十三丁
△罌粟まく　八十三丁

生類

この部ハ八月一ヶ月ノ生ものとあり

△熊帝　△うつくしかる　八十五丁
△稲負鳥　八十四丁
△鶺鴒　△ゆすさき　△石たき　△ちゝかゝり　△ちゝさまるび　△ちゝさまるへ
△つゝみ石　八十四丁
△渡鳥　八十四丁
△朝鳥　八十四丁
△小鳥　八十四丁
△色鳥　八十五丁
△鶸　八十六丁
△山雀　八十六丁
△こがら　△小淺黄　八十六丁
△平雀　八十六丁
△日雀　八十六丁
△猿子鳥　八十六丁
△照猿子　八十七丁
△頬赤鳥　八十七丁
△ゆるぎ石　八十七丁
△瑠璃鳥　八十七丁
△眼白鳥　八十七丁
△鶉　八十七丁
△島鶉　八十八丁
△鳩　八十八丁
△翡翠　八十八丁
△連雀　八十八丁
△星長鳥　△練鳥　八十八丁
△啄木鳥　八十九丁
△菊戴鳥　八十九丁
△椋鳥　八十九丁
△来鳳　八十九丁
△猶子鳥　九十丁
△鶏　九十丁
△去ゝ　九十丁
△蒿雀　九十丁
△橿鳥　九十丁
△額鳥　九十丁

△鳶鳥　八十丁
△雁　△ノ部　△ノ門金　△ノ部　△ノ門　△ノ部　△ノ門　△ノ部　△ノ門

はるさ月　秘蔵抄出　△さはさ月
△ふさう月　已上莫傳抄出　△秋月
△明見月　△紅漆月　已上藏玉抄出
△長月　哥ハ九月ハ走む　俳ハ八月ハ又九月ハ長月　△竹乃春

異名註

△桂月　桂の花開く時故名づく　桂秋も同
△清秋　くハ此頃空明ふ清き故
△仲高ハ秋乃中　いく夏
△壯月　くハ八月幸ど得ハ塞壯ふ出　雅
△白露ハ節の名く註節の処ふあり
△南呂ハ律の名く註ハロの律の処有
△葉月　と云ハ此頃木ハ葉ふ色づき落る故葉落月の略也清輔奥儀抄
又くくくくハ八月の千ハ字略しなり
又くくくくハ初来也ノ初て来る月故
△長月　くハ夜初めてあるたと覺ゆ故ふ實ふ長きハ冬ふしく夏の短くたり對してあるたと知ゆ也季寄ふハ八月くあるふれも九月と
△竹の春ハ此頃暑さ去り寒さ来ん

とする氣にて至て涼ふ故ふ唐の俗竹の小春くハ贊寧筍譜ふ出
此月竹さかんふあるゆへさ名づくくくくくくくくくさ花さ月つくさふも考ゆへあるをし

㊐　秘蔵抄　ちづさ

初名の声ふ文ゆるりさづさ有
朔乃さくれうを考のまん

仝　木漆月

ハとうんく名ていと考くふを出
あやむすきさやはきさ

莫傳　草漆月

ふ花ふてくさ考れ
くさはハくくくくくくくくく

白露

八月の節〇七十二候〇草木七十二候〇日蛍入〇昼夜長短を記す

八月の節と白露とハ陰氣漸く結して露凝て白し故ニ白露と云

△鴻鴈寒を恐て来り○玄鳥の花さく△燕ハ此頃北へかへる○桂の花さく香風ふかぐわし○諸鳥ハ養羞をよろこび食物を蓄ふ△冬のやしなひとする○鼠ハ秋海棠の事ハ始て嬌ハ蓉といふ雁燕の事ハ委しく生類の部ニ出す

節占候

今日晴天なるハ稲作十分の実入り

日和ハ晴きてなるハ火ニ属なるゆへ雨ふれも實ハ少く風はまぎれなしひわふちゆ

秋分

八月の中〇七十二候〇州木七十二候〇日蛍入〇昼夜の長短を記す

節ハ十六日ハ秋分と云秋分ハ九十日の真中故此頃昼夜長短等しき

此月ハ来二月まで雷声を収めて鳴らず○蟄虫ハ坏戸ハ虫冬の寒氣を防ぐ為ニ土にて穴をふさぐ

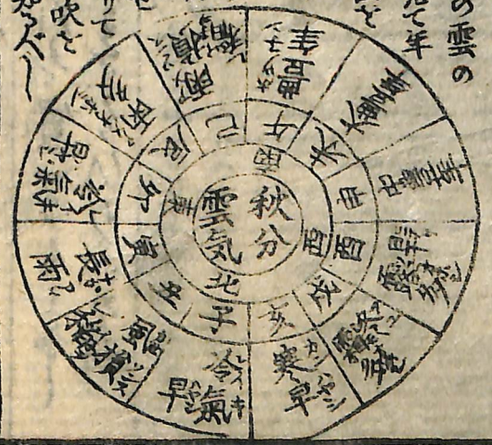
○丁香紫ハ花の咲と云

○水ハ是ニて涸ル

○金精しゐる星夜の中に西海ふかくまり落るかくるゝ

秋分 天氣占候 今日晴天あれハ稲作よろ〜しゐ夕立あれいよ〜然も冬にまりて米の價貴き事もあり○西方ふ白雲有るハ秋の収まよ〜 黒雲ハ来年早まり○秋分の節社日の前よあれハ来年米豊こ

今朝の雲の行と見て年の豊凶をあらる但行方定まらざる時ハ雲の出る方へ吹と見て知べし



秋分 禁忌 殺生をする事なれ刑と行ふこなれ

喪と訪らひあるいハ病人と尋訪ふ事なれ○大酒と侍むなしーみぐりれ他行をるこなる

秋分 祭祀 今日先祖と祭之〜二月春分の祭ふ同

日令 八月日の定まりたること支の定まりたること此部ぶり

朔日 ○いたの月まても朔日のひまさくれハ其月中の日和大抵〜〜〜

ゝ帷子を着て麻上下にて
き礼を勤むべし　はかま上下略儀
○小笠原家秘呑進退集曰五月
五日より八月晦日までは帷子を
八月の内ふ若寒き時は袷をも
小袖をもかさびて下る
かさびをしるべしと
ゝ

朔日

天中節

此日は凶悪の日
故に昔は陰陽家
天中北ゝ符と貴
賤の門戸に貼をして邪気を
れは陰陽一家の説
○五月五日の午の刻を天中
節とゝ五月五月五日の異名
とをはなり　撮要録に出

朔日

八朔

△八朔の賀△田実の節
△田面の祝
△田の実の祝△憑祝○特牛節句
○此日たのみ入もたのみ

儀式もゝひて家々たがひふ物
を贈ることあふ事あり○公事根源
ふは此事本説なり世俗の風儀
也とあるは後深草院の建長の
頃より始まりてあは田のこと
米と折敷土器をゝれ入きて人
のもとへはこうけるとかやと出
るなり○日次記事ふは此祝ひ昔
はなると事なり中世にはなりて
農民稲の初穂と今日禁中へ
奉ること事なり起ることあり
○一説ふ田の実田の面なるべくかく
字と頼むとゝふ字ふ通りて人をた
がひふたのもちゐむ心なる物なれば
あゝ事なるべしとゝり○今世の武
家万民ゝに厚く祝ふ事なり
○唐土にも今日勝とす月令廣
勝ゝ新穀を祈る祭の名なり其外
説多委しく日本歳時記出
(俳)八朔や丟ふ寒さ踊のゝ　東水

注　今朝これに物ふも者の強たなたのれもたのむ節句ゑるゝん　文付

朔日　繪行器　木地にて行器乃小さなと造る日出度繪とかさたるく田の實又い菓豆のたぐひさゐくの物を作るを焼て互に祖たのむの意ふ混じて今日おくふゑう京師い今もそてあつゝう八朔前日ふい市中に繪行器と賣りあるく也真粉糕ふ角小豆を粉らとと粘てこれと藤乃たれと御所言葉にいゝう是ともゑがるひを入て贈と合と

俳　絵形恵や上ふ封箱の紙に蓮華愛ゑ[illegible]絵ひ恵いある硯文除鬼

朔日　綵雀　○造雉　○造松虫　○造鶯　右の品ゝも鎖々たるひくふ作るて繪ゑ[illegible]ひるそへて児女同士みく

てあり又意故仁と枝ゑ[illegible]ゑうとも行くふこゝあう

俳　かゝる綵雀の細工人　貴文　花に[illegible]上の[illegible]

朔日　御馬叡覽　今日東都ゑう二疋と献ゑる馬士兼付の竹を[illegible]てれひ来る古十五日駒迎の例ゑや

朔日　京　○松尾神事　相撲　東西ふ分つ洛京方　嵯峨方と云往古い内裏相撲節會の通して行ゑ[illegible]ゑう○八幡ゑうはその式社傳あゝ[illegible]ゑう○神泉苑善女龍王祭

朔日　八朔梅　是早梅の類ゑゝ堂上方の賀儀ゑも取用ひらゝ事も有ゝゑう

俳　[illegible]や稚子ゑうの秋の[illegible]

八朔や長沢ふ[illegible]と梅の花　[illegible]

梅雨や竹の葉ゑうと河日[illegible]

朔日　妙術　眼明袋　今日百州の露を取りて紅結ふ

ばくさ眼とあるへい目明ふる
○又方柏の露を取て洗ひてもよし
○七月晦日東ふ向ふ樹の枝を
きりて炭ふやき今日其炭ふて
赤口白舌隨節滅とかきて門
ふ押せハ火難盗難病難口
舌等乃わさはひ除まねかる
るをいう

朔日　生花式　○秋海棠○萩○桔梗○秋菊○今日生之

朔日　和泉三村祭　堺申斐町の東ふあり開口明神
と云延喜式ニ曰當地昔の名ハ開口
村木戸村原村の間へ故ふ三ツの村
明神と云ふり又大寺とも
ふるゆふ俗ふ大寺祭ともせ
ひまり住吉明神乃外宮と
称を祭りハ朔日二日兩日ふり

二日　不成　○今日白髪と稜ふハ
就日　○交易又衣服と裁ふ
三日　風雨あれハ麻宜しくハ布の
價高し○晴天あれハ冬早く
米ふくらし○今日日月影曇りて
あざやふ見えざれハ一月雨多し
○今日ハ竈の神の生る日ふ祭ハ
十二月あれも今日竈と清くもれハ福ふり

三日　和泉堺天神祭　戎町東ふあり
威德山常樂寺
と号を昔ハ塩穴村ふあり故ふ塩
穴天神とも云六月十三日と夏神
樂とし今日と秋祭と云神輿を
びと島へ渡御あるり○毎月
廿五日ハ連歌興行あり
俳　戎町とし秋の揚る李坂
四日　○今日將碁とさして勝る
者ハ年の終まで福ふり有
かる者ハ病ふかかる故ふ今日を
圍碁占福乃日という

四日　天壽の節　唐ふてい今ヨと天壽の節くいへ

四日　京北野祭　○祭神三座中ハ菅亞相なり昔ハ祭五日なりしと永承元年より八月四日ふ定りなり拾芥抄出

此祭甚美麗ふして神輿下立賣の西御旅處へ渡御ありしと社記ふ見へたれども今いるし

○按ずるに應仁の頃なり此祭退轉して今ハ軈て氏子町なり芋莖ハて神輿と作り渡御のまねびとおさまりたるも九月四日なり是と俗ふ芋莖祭といへ

哥　年中行司哥合　蘊堅

たのむらえのちりぬるをたれかすむ　少弼の家ハ此ことめぐらせ

俳　さくめるを紅日和と小つゐ　移水

狂　いすゝ(いうこゝ)のるゐ場と成と　執流

五日　千秋節　今日唐玄宗帝降誕の日ゆ故名く後ハ

故ハ天長節ハ云今日王公ハ鑑ヲ献ず士庶人ハ承露囊ハ云りめと相れ

ゐる　隋唐嘉話ハ揚方里ハ輝塵録ハ出

○今日交易衣裁を忌むなり

五日　近江白鬚社開帳　昔ハ今日開帳あり

元禄の頃なり絶なりしそ

俳　戸と成ハ神の名ハ社の名　簾隅

七日　南都○道祖神祭○こゝ祭ハ猿田彦命ハ　今御門町ハ社あり

八日　今日ハ竹酔日ハ云竹ハ植ハ能ハ成ル事ハ五月ハ　五月十八日ハ

十日　不成就日　今日小児の額ハ朱ハて点とゝべし疱瘡癖疹ハかるゝし諸病をのぞくなりハて灸ハ

十日　和泉○上石津祭　神体蛭子の神ハ○下石津ハ社有　此祭ハ正月十日なり

十日 越敦賀祭 敦賀の吉角鹿の祭神

仲哀天皇の氣比社と云人神事二日より今日まで云

○願いしく京師祇園の祭

る山かぐら等つろく有り

十一日 ○来年の旱歌 水の吉凶

い今日朝早く起て水辺に

至り風波さき処の水と一處うち

かくして其水を見て知る其水

ひくやうるハ来年水多きまたは

うり水溢るやうるハ来年旱

司召 ○秋の除目○京官除目

〈定考〉名目おし出

諸官人王臣國司に至まで才

徳の勝る由を奏して品の

爵禄を賜ふ日なり春の縣召

ふおなじ二月に人柄を考むる

列見といひて召あつめて

奏をなを擬階の奏といひ

此人々を多くひ出して爵禄を

賜ふと定考といふなり

哥 拾遺 貫之

つくつくふ世をうきものと思ふの

わも秋とやなしそるらん

俳 定考や笑ひ目あすを名残草

狂 扨も明通らぬ人の司召

侍るのそ花の宮もまつへ 越前

十三日 ○大鳥明神祭○社は大鳥村に

泉州和泉の宮〈祭は年に度〉

十四日 待宵 〈小望月〉 毎月十五日望月

称ふるゆへ今日を小望月と云

○十四日を待宵といふ事中頃の

俳諧ふひ出しうり。和歌連歌

〈〉て待宵とはむ〈〉

哥 待宵〈〉ある人を待ひ

のほ〈〉云心をそ〈〉も恋の歌〈〉

哥 十四夜月といふ題を

よみもをくるい 道香御

あす秋今宵の月ふるあさ
明日の宵中の秋をはらく

連　明日の名月もあすの宵作　宗祇
月今宵もるも明日の光ゝ　宗牧
月ゆゑむ思ひたゝそあるゝ　昌叱

俳　名月や嵯峨のいなごの淋しさ　芭蕉
名月やすつぽんの物淋　蕪村
まつ宵やさいたげき月の作　蓮二

狂　あすのうとゝふんだる麦のさと
ふうとゝてあけくもい名月　左史

詩　十四夜五字對句　同上

天意將圓夜　只爭一夕早
人心待滿時　恰作九分圓

詩　十四夜七字對句　詩魁

今夕試見先與約　未望夜
來宵定賞莫相違　鏡又圓

詩　十四夜月詞　白居易

光彩遍空輪欲滿　光を散して空に輪
モ満ントス凡也

詩　仝　白帥

二七秋容月色奇　獨擎吟筆
飲芳巵　二七十四夜ノ月面白クヒトリ
詩ヲ作ラント筆ヲ取又酒ヲ飲

十四日

豊　○八幡祭　府内小あり　今日
後　放生會行る魚を海中へ放
事　驚ゝ又濱ゝ市をなる
甚賑ゝ是を府内濱の市と云

十五日

今夕月曇れば方の事なし
今日雨ふれば来年正月元日の
天氣ゝ又来年水多し　○月曇
き鮒胎む事なし又蕎麥も
実なし　○月あたらふれば
多く魚をくるしとなり

十五日

中秋節　秋九十日九月最中
ゆへ名づく又八

月の異名〻〻もろ〻〻。唐にも今宵と中秋の夜〻いひて月を賞とる事本唐の世より盛しして詩人文人詠多し野雄ニ出

十五日

名月

△良夜△良宵△端正月△三五夜樂天詩

△新月△名高月△今宵月△望月△最中月△月見

△月こよひ△今日月△明月

△芋名月故事ハ出ス△十五夜

○日本ハ十五夜の月を賞とることハ孝元天皇の御時より初まる舊本長明四季物語ハ出ス又今宵の月をふる〻〻読る哥ハ天暦の御製あり月の名多○漢ひてい唐の玄宗貴妃と大液池のぞゝそ月を翫ひなさい〻事又羅公遠ハ此夜玄宗ハ侍て月を翫ひそる事開元遺事逸史等ニ見る次ニ故事あり○名月の事説多し委〻〻く日本歳時記ニ出ス

○望月ハ満月あり一ニ三ムヌモ相通じて三〻モ〻同音ハ又月の出る時入日と向ひ望む

ゆへ望月〻〻毎月月と日と相のぞゝそ月〻〻へい連誹ハ今日の季○端正月〻〻ハ端〻〻正月ハ斯〻〻事文類聚ニ出○新月誹諧の季ハ三秋ニワる〻〻る者もあり○詩歌の説ハ違〻委〻〻く三秋の部十二ノ目

名月故事

霓裳羽衣曲

羅公遠ト云フ

者十五夜玄宗ノカタハラニ在テ月ヲ翫フ杖ヲ取テ空ニ投ケレハ化シテ橋ト ナル其色銀ノゴトシ帝ト共ニ此橋ヲ登リ終ニ月宮ニ至ル仙女數百人アリテ歌舞ス帝問コレ何ノ曲

ナルヤ答ヘテ云ク霓裳羽衣ノ曲ナリ　玄宗コレヲヒソカニシルシ又橋ヲクダルニ歩ニ隨ヒテ橋ハ次第ニ減シケリ

其後伶人ドモヲ召シテコノ曲ヲ製ス事文類聚ニ出

月餅

十五日唐土燕都ノ人サヽヲ餅ヲ作リ名ト形ヲ思ヒヽヽニ好ミテ人ニ送ルナリ

是ヲ看月會ト云　廣義ニ出

○又麪粉ニテ作リヤキテ大中小段々ニタヽミカサネテ上ニ五色ノ多サリヲ置キ桂ノ花ヲサシハサミテ月ニ供ストイヘリ　醉水談筵ニ出タリ

○本朝ノ團粢モコレニナラヒタルモノカ芋ヲ食フハ諸國ニ普ク子ケレトモ東都ノ俗ハコノ日蜷ヲ食フナリ

狗寶

狗中秋ノ月ヲ望テ戲寶ヲ吐クヽ團ノゴトシ

即チ其寶ヲモテアソビ復コレヲ飲ナリ　農夫コレヲ知リテ月下ニ光リアルトコロヲウカヾヒテコレヲ取ルトイヘリ

續古今

天暦の御製

月ゝこそ見る月毎にこの月の　ゆくへはいつの月かたれき

詞花　駒引のまゝ合て　藤朝信朝臣

引駒の新とやゝへてあ山坂の　せゝ後ゝゝそ月は出ける

拾遺愚草　定家

月はいつ秋のまへもさねなし　かゝゝ月のかきのそゝ

金葉集　仲正

めつらしき秋の半なりけるかな　月のゝこれるを見るとおもへば

金　公實

秋は秋なをおなじくゝれい　ゝゝひの月のゝ見をかゝ

拾玉　十五夜待月

月もろ〳〵いく夕かは今宵八せ
かひてまつらしをのもろ紙

詞　ものもろ〳〵月こそひさしけれ。
月ものもろ〳〵名はあり。月。名はかの歌。
ものもろ歌の月ごとにものもろ〳〵歌。こよ
ひ名をこそ。ものもろ月の歌。秋の
ものもろなるべの秋。ものもろ〳〵月
○歌よい月い四季戀朝よりものもろて
ものもろあるものもろ月ごとにものもろ月
ものもろ歌のものもろよむべし。物むつ歌
物食をものもろ。食ものもろ

連　ものもろて月もろ秋のものもろ月　宗祇

雲ものもろ秋の月ものもろ月　宗祇

月の秋のものもろ月の一歌乃ものもろ月　昌吃

月ものもろ月ものもろ月ものもろ月　紹巴

俳　月ものもろ〳〵月ものもろ月　紹巴

月月や秋ものもろ月ものもろ月　紹巴

名月や月の上ものもろ月ものもろ月　其角

月ものもろ米搗ものもろ秋乃月越へ
月ものもろ歌ものもろ月　野水

月月の磯ものもろ月　ものもろ月
月月や平ものもろ月ものもろ月　蓮
雪の秋ものもろ月ものもろ月　月
月月やものもろ月ものもろ月　夫石

名月や月ものもろ月ものもろ月　尤尼
月月や酒ものもろ月ものもろ月　尤尼

狂　女ものもろ月ものもろ月　貞木

月月やものもろ月ものもろ月　貞木
紅葉のものもろ月ものもろ月　貞木

月月の三月ものもろ月　貞木
むものもろ月の月月のものもろ月　貞木

閑名月

八月ものもろ月の月十五夜ものもろ月

連　今宵ものもろ月ものもろ月　貞木

俳　月ものもろ月ものもろ月　貞木

名月蝕

哥　いむものもろ月ものもろ月
ものもろ月ものもろ月　西行

俳　いむものもろ月ものもろ月　西行

名月暈

○月の暈其外名月の事博物基の

ソの部ニ季〻ニ出ト

(俳)傘にて面くれ乃ふの月　大雄

(狂)天ゥ下今有ル月ニ二ツの傘
傘かゝ〻ル月ハ雨ノ天望　雄春

名月曇

雨ふりて晴てくもれる

(哥)家集　藤原頼

くもれとも人世ハ雨ふる今ハかも
くもいのかゝる月のかりれふ

(俳)紅葉の花もいろく月と桃尾
浦ふる春と月見の初秋はな　赤雷

(狂)見ぬ月ニ白ゐ月ハ月ハ来ス
かゝる月見の秋ハ来ルもの　義長

名月雨

(新)御集

月ハりまかゝる〻新や
ゝ〻かゝ〻ハ雨もなさけい
あらあはれ月　後水尾院

(俳)月ハ雨面ハ月ハ極光の音
雨ふりてまぬの中ハ月ハ入る　湖

(狂)月新よりて今雨ハ月ハ
ふりかゝりたる面の傘　近友

(詩)名月五字對句　同上

天上十分月　一年光正満
人間一半秋　萬里氣尤清

(詩)名月七字對句

不知千古中秋月　九秋半
老却幾番浮世人　萬里圓

詩礎

○此句ハ哥ニ大カタハ月ヲモメデシ
コレソコノツモレハ人ノ老トナルモノ
トヨミタルト同ジ心ニテ昔カラ
此中秋ノ月ヲ賞美スル人ノ
イク度カ年ヨラ世タコトカ
知ラヌト云フコヽロナリ

(詩)中秋之句　秡華

詩　一年逢好夜萬里見月時　張佑

一年ノ中テ面白ト夜ニ逢テ萬里ノ外ニテ月見ヲスル時ハ今宵ジヤ

詩　三秋端正月今夜出東溟　韓愈

タヾシクマンマルイ月ガ東ノハテノ海ヨリ出ヅルナリ

詩　高秋渾似氷萬里正圓明　靈源夫人

秋フカクナレバ山モ川モスベテ氷ノスミワタリタルヤウナケシキデ萬里ノアナタマデ月ガ一メンニアキラカニテ一トカナルヨシナリ

詩　三五夜中新月色　白樂天

十五夜ノ月カマタニサヤカナヤウニミエル

詩　名月之詞　唐　僧康白

尋常三五夜豈是不婷娟

十五ヤノ月モアザヤカニウルハシクナイデハナケレト八月十五夜ノ月ハカクベツナモノニヤトナリ

及至中秋半還勝別夜圓

月ノト五夜ナレバマタ外ノ夜ノヤトカナルニハマサルモノジヤ

月ノ清光凝有露皓色爽無塵

カコツテ露ノヤウニ見ユル皓キイロサハヤカニケムリホドノクモリモナイ

自古人皆望年來復一春

ヘカレヨリ人ミナ今ヨイヲ賞シテ一トセニ一夜ノ良夜トスルナリ

詩　名月之詞　唐　王建

中庭地白樹棲鴉冷露無聲濕桂花

庭ニハ月ノカゲ白ク木ニハノカヅラノハナニコリフレヅカニシテウルオヒヲ生スルケシキナリ

今夜月明人盡望不知秋思在誰家

今ヨイノ月ハ世上ノ人皆見テ賞スルニ方其中ニ実ニコノ秋ノ情ヲヨクシリタル人ハ何クノ家ニアランヲシラヌハ我ヒトリテアロフ

狀　月見之文　時藏蘭文

良夜之清光萬里同
賞如公得閑請共遊
廣池行厨按排已具
爲速許駕

尺牘 昏暮并王解

良夜 仲秋。此夜 晴光 名光。

潔萬里 万郷。万國 同賞 (上)

称歎 (中) 縱目 行厨 (上) 浅醋

(中) 麁饌。淡飯 按排 (上) 設不

勞公 (中) 悉余相計 許駕 (上) 仰

望伏侍 (中) 相許然諾

名月文返事

(状) 名月文返事

恭命一輪之明輝王賞詠記

得高筵會詩客開地吟行尤
一大勝事應招趨拜以謝

尺牘 上中下昏暮ヲ記ス

承命 (上) 辱昏 (中) 指示 一輪

明輝 万里素影。秋月佳名 賞

詠 絶比倫。勝遊賞。何加 記

得高筵 (上) 聞說瓊席張雅

宴 (中) 群友呼來爲宴會 閑

池吟行 池上遊翫 一大勝事

○詩人博物。興趣。逸興

應招 (上) 一諾應命 趨拜

(上)疾至不辞　(中)来謁　(中)不サツソクオミヤニマイルベシ　○ヒイツテオメニカヽルベシ　○サツソク

起時　(中)倒履走謝　クツヲ上　○トリアヘズマイルベシ

十五日　放生會　放生川ハ[illegible]元正天皇の御宇養老四年ハ征夷の事ありて日向大隅大ヨ乱禁庭より宇佐八幡宮へ御祈誓ありて敵を亡ぼし其後八幡の託宣ありて此度の軍ハ人多く死ぬ放生會とおすべきよし神勅ありしより國々ハ初る文字錄ハ[illegible]来記等ハ出其外説多し委しくハ神佛祭礼記に出すなりとこそ

(哥)年中行司　為秀

業ゆゑにたゆる身もなくなれいるるとなつの恵みに

新撰六帖

知家

男山社の名ハ[illegible]ちひてん川流ハたるのはなのうるすゆ

(俳)社に参るハ足弱ハ放生会に参詣参るのはあるあるの恵帽子魚道

放生会ハの約束式　釈　仏法林　竜宮ハて出ハ[illegible]

(狂)石清水八幡ハて殺の肌ハ[illegible]て放つ国のきなく　近友

十五日　山城八幡祭　当月八幡祭ハ放生會ハ諸國ハ多くあり次ハ記す山城國雄山八幡宮ハ行ハ事ハ勅會ハて公卿殿上人御祭向ありて甚厳重なる御神事なり放生會祇園會土塔會を本朝三大會と昔ハ申すなり今ハ放生會のこ勅使御参ありて祇園會ハ其式のこう土塔會ハ無さ[illegible]ハ放生會ハ今暁寅刻神輿御下山あり

中頃兵乱ふようて退轉あるしる
延宝七年御再興あるるそ

十五日 諸國八幡祭 ○京都さてい ○御所 ○若宮 ○等持院 ○廣沢 ○えゝ枝 ○山崎 ○門出 ○大坂ふてい ○三ッ八幡祭 ○江戸さてい ○深草 但陽年巳卯 ○法谷 同上 西くほ 同巳未酉亥 ○志賀八幡祭 近江国 △鶴岡祭 相州鎌倉 △譽田祭 河内八月の神事あり十四日の朝さて奥院渡御あるる △宇佐祭 豊前の国八月十五日祭礼の事なり社ふ始てしくいつ △宗濃津祭 伊勢国昔ハ社ふ寛永九年造営あり今ハ ○豊浦祭 長門国豊浦郡むの祭ハ九月十五日ハ昔ハ八月ふあしいや △箱崎祭 筑前国 豊前門司祭 大祭実外多 地物 地名

十五日 播磨野口念佛 孝謙天皇の御宇敬信ゝ云僧加古川ふ庵して念佛を常ふ旅人の荷を負ひ

ゑゝて行てもゝ負観八年八月十五日盗賊のゝふ首を切ら
ふ其庵の跡へ寺を建教信寺ゝ
号す今日僧徒集りて佛事をする寺

十六日 駒迎 △駒牽 △引分の使 △望月の駒 △こう原の駒 △上野駒 △武蔵駒 △穂坂駒 ○昔ハ諸國の牧より牧くハ馬を奉る 駒野の事なり 禁中へ馬を奉る今日信濃の勅旨の牧より六十疋 逢坂山さて引来る八右馬寮左馬寮の官人請取て禁庭へ奉る天皇南殿ふ出御ありて御馬を御覧ゝ公卿已下次第に御馬ゝ給ふる 尚又次將とりて院の御所東宮へもまゐらせる此勅使を引分の使ゝ云 ○元ハ十五日ふ有さるゝも朱雀院の御國忌ゝ當るゆへ十六日ふなりたゝ

江家

哥　雅具

続後撰

あふ坂の関のこなたに名を聞しかな
今宵を秋のもち月の弱

拾遺　馬遠

あふ坂の関の岩角ふみ越て
ふるさと出るきりぎすの弱

詞　いくきの弱〈引きけれ弱〉宮人の出てむかふるあふ坂を
いかゆかむ〇あふ坂の弱〈実のかたらひ弱〉〇ふ
ちの弱〈実のかたらひ弱〉〇ふるさと
弱〈お坂の松ふるさと弱〉〇よろ
むかふる〈引合せやそむ〉〇弱〈ふるやと
〇かくふ引かる〇弱〈ゆく〉〇立出
る〈引もたどらぬ〉〇むかふるの弱
〇かけも名ぞ弱

俳　弱〈軍や庭てたかせ月とさ〉李一
弱〈よや伴茶の義れ星非ゆ〉其路
〈富士出て富士と弱の弱逆〉宗因
弱逆〈見ぐく公家の名を引李波

狂　逢坂の関の岩ぐ寄たるて
腰やらんきの弱　貞徳

十六日　十六夜月

〈宵不知〉俳〈八
今月の李〉〇寸哥
ふい説多〇三秋の十三夜月ふ出を

詞　さやけさくきのふの夜〇あふ光
そふ〇ひさよひの夜〇月〇山の端
ふいさよふ秋〇去ていさよふ〇
きのふにもれぬ〇

俳　ひさよひもれぬ秋の歌　芭蕉
十六夜やちり場の海老拾ふ　松雨
ひさよひや良てけば人間に揚　関山
ひさよひや生弱のそとてこと　木奴
十六夜の月のむれ初めるる　正秀

狂　沼名て寄ひかそ月の名
いさよひ〇ひかり多　鳥兆
せかるおいるよりて後の名つけん
いさよひ〇尾とてふ月の自徳

〈立待〉〈居待〉〈伏待〉〈更待〉
右八月の李ふ出る哥もあり
又三秋ふわろ〇いろ李の哥も
あり委〇く三秋の十三丁ふ出を

十六日 京都 菅太神祭 菅家御所の旧趾也西洞院五条坊門の南ふ在菅神降誕の地なり紅梅殿へ是ふ(ハ)て五条坊門の北なり 橘今縁ゑ小社と存して其所のくり神輿渡御のゝ〻鉦針五本ゝゝる能菅原の伝の歌ゆゑ(ハ)ゝ 李坡

十七日 ○仍圓月 今夕の月を名ぢくるなり 杜詩ゑ出ゝる

伊豆 ○三嶋神事 當社神祭年分七十五度の内今日其一なり

十八日 不成就日 ○龍王會 今日四海の竜王會ゝる日なり

十八日 京都 御霊祭 上の御霊ハ京極通筋違橋のあゝ(ハ)ゝ下の御霊ハ京極通大炊御門北東なり上の御霊同神ゝ ○御霊ゝゝ崇道天皇。伊豫親王藤原夫人。橘逸勢。文屋宮田麿。藤原廣嗣。吉備公火雷神。以上八所なり近来勅して元文帝をもいれ奉りたてまつるなり

○中の御霊ハ上の御霊の末流 ○桂の御霊祭 今日相撲あり

十八日 南 ○西大寺光明會 今日なり 都 廿四日迄八幡太郎義家公忌

十八日 伊勢 菜名祭 春日大明神を祭るゝ前日社の前通南北ゝ大車一輌あり夜小入挑灯 当日車を南北へひきまゝ歌舞あり

十九日 今日白髪を稔ゝ(ハ)ゝ ○交易又ハ衣服を裁ゝ(ハ)ゝ

廿日 ○安居大神 芝原祭

廿一日 南 ○韓國祭 社ハ高間町の南韓國田ふなり韓神の祭 都 河 ○上原八幡祭。上原西岡山村ニ在

廿二日　今日沐浴し枸杞湯たり

京　○太秦聖德太子會式

廿二日　長崎　菩薩祭　唐の舟玉神あり姥媽神

といへ長崎と唐人の寺四ヶ寺あり此寺々にて今日菩薩祭

僧徒唐製束して修行とあり唐人叅詣して黑き棒とつ

廿四日　京　○太秦明神祭　吉田山と

都　あり神輿一基あり

廿四日　江　○亀戸天神祭　隔年に行る

戸　子寅辰午申戌あり寛永三

年太宰府より勸請奉る○六月

廿四日夏越の祓淺草川にて修行と

廿四日　筑　宰府祭　祭神は天神と

前　ハ　祭公は延喜元

年筑前太宰府小左衛門同三年歳

御歳五十九ヶ委しく博物筌に出を

廿五日　○今日枸杞にて湯浴して

よし○今日と天倉開と云

藥を煉てよし又は丸藥等

をもつらへて功能おほし

○今日白髮をぬけいみぞ

ぬけてくるしいなり

廿六日　南極老人星の降る日なり

祈禱善事をなす修らるよし

南極星は人の壽命を司る星

ゆへ今日と壽星現るいへ

廿六日　京　○崇德院御忌　崇德天皇の

都　御事なり今日京安井にて行る

廿七日　○佛會　此日諸佛菩薩東

海にありまる故と名づく

和泉　○熊通明神祭　中通社　長瀧

村　在開化天皇御守より祭始る

廿八日　不成就日　京　都　西院祭　堂土神は春

日社と祭

まる神輿二基一基は住吉明

神と同村と住吉社を祭る

九日　今日は萬物陰氣に感ずる夜分香をたく。○今日水陸とも
不吉の日なり遠方の旅行
又は舟に乘る事を忌むべし

月令

此部は八月日の定まらぬ一ヶ月の事を出す

彼岸　當月の節より十五日
季は二月へ　めぐり入る〈後の彼岸〉
又は秋季と結ひて秋のひがんと寺
(俳)彼岸ひがき　彼岸まゐり　蓮二

○京東山　泉山念佛おどり
又空也堂にもあるなり
○大坂天王寺春の彼岸と
同じく參詣人おほし

秋社日　〈秋社〉しうしゃ　秋分前
後とある戊の日を社日と
汁に春は二月の虫　秋は記と
○秋社日雨ふれば来年豊年なり

京都**死活杖祭**　〈死杖の祭〉
○褐速の社にて

三條猪の熊は在古は刑部省の
此辺にあり刑死人の為に社を立
祭るなり中世は千本引接寺
並に壬生地藏に春ごとに念佛
會ありこれをみな死刑人
の追善なりしなり

釋奠　上丁日ありこれを二月は
(哥)新葉　妙覺寺内大臣
唐人のむかしの新とうつり来て
あらけいるし秋の秋の月

礎　〈擣衣〉〈續巻〉○あこと是
衣板とも　畧語なり
東雅に和名抄を引て礎はキヌ
イタ擣衣石なり字又砧に作る
擣衣杵はきぬうちキヌイタ衣
板なり　即今云キヌタと見
えたり今は木盤を用ゐるも昔
は石砧なり故字も石偏に昏
女工の具の專用なる物にて上つ
方の緣邊ふも砧とそ長夏な

東宮舊事ニ曰太子　紙筆有石硯一枚　とあるハ澄撥ハ今の木
専着用ハ至て石と木かと
ハて製する持盤ハ後世木綿を
盤して綸子紗綾紬等かつやと付ふ用へ
今京師の染坊か用ゆへ石

衣打

衣四手打　衣打　何きも衣打槌子ハ
ハ衣打ハ面白く打音へ
聚ふ玄ゆふ衣をうつ様ハ類へ

(哥)新古今　輔尹朝臣

秋風ハ月ひむかう吹ふ
いまや出こん跡ハ
夫木　名処擣衣　家長

(詞)打ちまる。打ちまむ。ふ
ひぐ。ひぐ。ちまむ。ふ
ハる。ひそく。絹ハ麻衣。月の
衣毎。月澄む宿。月ハ

沈む。ちまの女ハ寝ぬ夜し
ら月。夜さむ。秋ハ夜の
夜。ちまあ寺。里ハ
月ふ。みてハ。ハ
ちまの。ハ。ハ
ハ。ハ。ハ。ハ
ハ。ハ。ハ。ハ
ハ。ハ

詩　砧五字對句

星河秋一雁　傳音暗斷続
砧杵夜千家　鳴杵自下當

詩　砧七字對句

四野山河通遠色
千家砧杵勵秋声

同上

詩　砧七字對句

遠村砧
夜雨中

詩　砧之詞　王昌齢

長信宮中秋月明　昭陽殿下擣衣聲
長信宮ハ漢ノ成帝ノ母ノ隱居ナリ昭陽殿ハ成帝ノ妃ノ居ナリソノ殿ニコロモヲウツハ麗ノ露盛モツキテサヒシククラスナリ

堂中紈草跡　紅羅帳裏不堪情
白露ハ堂ノ中ニ生タル小蟲ノアトニヲキワタレテアカキウスモノヽ帳ノウチニ居テオモヒニタヘカヌルヨシナリ

毛見　毛とつくいとへての草木とつくり耕しそめひらきさ地と不毛の地とつくるいと是ナリ博物志曰石ハ骨ヽ川ハ脉ヽ草木ハ毛ヽ土ハ肉ヽ故ニ毛見ト云ヘ

俳　毛見　海ヲ捨ノヽ初月松ノ蜂尾　毛見ノ鳴ハ蚊ノ音ヲ引ク蛇ノ如シ

落水　稲ヲ実入ルヽ田ヽ入置ヽ水ヲ抜ヽ

俳　ヲ為ヲ当ヲ身ヲ引ク百拙　紙ノ紙ヲヽヽヽヽ　水　江水

狂　引ハ為ヲ当ヲ身ヲ引ク百拙　つまゝ　水ヲ　尘龍

下簗　魚ノ身重クヽリテ河下ヘ落ツヽ簗ヽヽヽ取ヽ

寄　夫木　名所の川ヽヽヽ　水ハヽヽヽヽ

新結　今年の新糸かけて織こそ結と武州野州上州へ出せり

時令

此部は八月一ヶ月の時候をかく事を記す

暴風　△野分。八月に吹く大風。のわきとも草木を吹

△そるゆへといひたるなり又山下へ出る風をいふ　和名抄に出

哥　源氏物語

風さわぎ村もとゆるぐ木ゆへにも

ものすごくもあるかな　家隆

新後拾遺

吹ふきすぎ庵もそそのひさしにも

ゆかぬこたくぬ小のもれ水　後京極

夫木

きのふまでとよるなれば紫のそも

ゆかぬこそ園のへのもの

詞　吹ものの。ゆかぬ。ゆかの

紅葉。あるいは。あるきゆかの。ゆかの風。ゆかなるひく。

連　吹いるゆかぬ庭の花壇　紀氏

俳　秋菴いろ〳〵建る野分哉　抑居

狂　白家と風のすきたる秋のい

吹水晶の玉そちらかる　小唐山人

肌寒　△夜寒　△坐寒　△漸寒

△朝寒　△そゞろさむ

物ふるして寒さ覚ゆるとの

哥　新古今　基後

紫風の漸くすぎゆくあるこの

荻乃上葉の井そかりき

俳　ふるゝ蒲公英の花ゆ五月

漸寒や石の仏をもむ高野石

長夜　夜の至りて長きい冬

ものふる永き夜を秋の

季とするい夏の夜の余りの

みしるゝ此月いたりふ長く覚

ゆる故なるへし　八月より九

月ふ渡るなり

詩　遅々鐘漏初長夜　耿々星河欲曙天　白氏

(晋) 新古今

大りさの塩の松こそ[illegible]

[illegible]

(能) 知恵しぶ[illegible]

初汐 此月ハ汐の大ふ満る月故よりて〻秋ハ金気

金い水と得て盛ゆえ故此月大汐有時なり

(能) 初汐やよろこ[illegible]大の松え凍巳

[illegible]

今[illegible]

詩 初汐七字對句 詩礎

客光皆過浪難平 就天浮雲日半陰川漸満吹地轉

初汐 [弄潮之戯] 伍子胥呉王ニ殺サレ其屍ヲ

故事 皮ノフクロニ入レテ江中ニ流シケルガ其屍流レニヨリテ波ヲ揚ゲ

潮ニ依テ往来シケリコレ時子胥白キ馬素車ニ乗リテ

潮ノ上ニアリシヲ見ル者アリニ

是ニ恐ル是ヨリ毎年仲秋既望

潮水極テ大ナル時ハ衆人旗鼓

ヲ以テコレヲ迎フナリ

草木

此部ハ八月草木ヲ出ス

如此印ハ三秋ノ用来ル物

初紅葉 ○秋木の葉黄ばみ又ハ紅くなりそめ

紅葉する木ハ。櫨。櫨。櫨。

○合歓。其外数多〻中にも

かくての葉の紅〻くれなゐ見

事なる人々大ふ賞する故紅葉

くれなゐかくての事と思ふ歌

もいふ〻ふ紅葉と哥にもよ

そへるハ雑木の紅葉なり竜田川

の錦とよまれるも雑木の紅

葉なり能楷ハ薄紅葉〻初

紅葉と句作して八月とす

のこる紅葉こそ後の事なれ紅葉のこるは九月の部なり

(尚)秦なるはなの名ある今はなの家

深草やせこの後なるうん

(俳)乗物(ゆかた)はなの名ある 梅堂

物紅葉信の似の責ばいり 重頼

敗荷

(やもか)

荷衣。蓮の乗れ秋風を破き折まこるえ

(かいい)

。荷衣い葉と衣を見うてたるえ

(哥)結風ふわふと沈の蓮葉も

波をうとうてうてうているる 公武

(俳)「敗蓮」のさまと笑ふて哀蓮 黄道

(狂)白象とおもうとうと月新も

くうしてはやる沈の「敗蓮」 貞柳

(詩)敗荷詞 東坡

紅錦機空水國窮轉頭千蓋

偃秋風 夏ハニレキヲオル ハタノ如クル

ヤウニ見エタル葉モ秋風ニ打タラルヽ

鶯鶯一段榮

枯事都在沙鷗冷眼中 遠

花ノサカリニハ其アタリニアソブオニドリモ一時ノエイジハラキハメ・カドモソレモ今ヤビ蓮トフトロデハ「鷺」モホイナク思フベシ 蘆葉ハヨノ自ニ見テ井ハカモノ眼ノ中ニアルニジヤ

新蓋州

(やなぎ)

形をき似て秋穂とるす

俗ニ川安ニいハ(和名)かとな色ね

(異名)黄州。菉竹。蒿州

本朝染色家ニ用ル物ニ染ル黄色なり。唐ニ形違フ竹

似て細くうす〜茎九〜煮て

染物ニ入ル本州ニ出る。唐ハ竹ノ類ニ詩ニ作ル

(俳)福祥ニ枯ル安ハ「ふうの色」秀石

名木散

俳僧季寄ニ昔より

出て分りうと近世の

説ニ梅桃柿の類此頃紅葉ニて

散りの惣名ハ〜いろ〜尤有ル

冬の季ニ出る名草枯〜ハ同意ニ

(俳)十月の角力ハ果や名ハ名ハ芝山

牡丹根分

(ぼたんのねわけ)

夏川の地とうう乾

古き圃の土と

細を砂と交ぜ蒔く 蒔は八九月
紅き葉と出ぜ 後この土を
後し栽べし 糞溺を用ゆるハ
ちゝかゝゞ冬油渣とを比
根のかゝりゝゝ置へし

俳 拒とをてか家の垂ぬるを中大成

狂 果蔬をいはゞて絡ゝ 瓜茄の
器をれ拒をふるをとゝ 松堂

木芙蓉

△芙蓉とゞゝゝもいふ
○木蓮白氏文集○拒霜
事物異名 華木 本艸 和名 木ちゝす
八九月初て開く故拒霜の名あり
○本艸李時珍が説ふゝゝゝ芙蓉と
ゝふゝ荷花のゝゝ偶此一物荷花と
相似ゝゝとして木芙蓉と号くと
云云 後世二物一名と混ぜゝゝ
故終に荷花と水芙蓉とゝゝ
此月の花木芙蓉とゝゝ

俳 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ芙蓉ゝ 潮春
木芙蓉や花を咲ちゝ紅もあり 嵐雪

木犀花

異名 巖桂○木樨
○花桂○七里香○本
艸家の説ふ木犀へ巖桂ゝゝす
本艸尤然りされども桂の種
類多ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此ゝ白花よて香気甚高ゝ

桂花

是らべての桂のゝゝゝと
ゝゝ一種ハ巖桂よて
木犀ゝゝ一種ハ菌桂ふて葉ゝ
三ゝゝの文あり其花黄ゝゝ又
白きあり但ゝ加茂祭りゝ用
ゆる桂ハ花三四月ゝて是ふハあ
らず享保中南京種渡りて所々
ふ移ゝ葉の筋末まゝて通る是
上品ゝ肉桂桂枝桂心官桂此
木より出るゝゝゝゝゝゝゝ日本
ゝゝゝ桂樹ハゝゝゝゝゝ
の人ゝゝゝゝゝゝゝゝ 中世
ゝゝの学ゝ雅ゝゝ極てゝゝゝの
月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 光後

詞　月のうゝ。桂と折。桂の花。かつれもふ。うゝ。うゝ。

俳　白ひえ。赤ひえ。流れ桂。李玲。ゆゝ。ゆゝ。章酒。ゆゝ。木槿。芭蕉。

狂　ひえ。ひう。狂おり。うゝ。るの。花。伽も。禅。木槿の花。実朋

詩　凝露堂木槿　楊遷秀

夢騎白鳳上青空。徑度銀河入月宮。上界風塵一ノ行テ天ニ昇リ月ノ宮ニ天ノ川ヲワタリ月ノ宮ニ身在廣寒香世界。覚来簾外木槿風。身ハ廣寒トイフカウバシキ世カイニアルト思ヒシガ夢カサメタレバスタレノ外ノ木槿ノ風ニホフノデアリケレナリ

縷紅

葉細密にして杉藻のごし。淺青色

檀特花

一名西蕃蓮。葉ハ芭蕉ニ似て三四尺ニ過ぎ冬ニ枯て春生ず。七八月莖をめぐんで。花と。ひゝく赤くして穂のごし。實とりて念珠にす。蕎麦。

詞　仁に似ゝ。

俳　ゆゝ。岩の浦。淫や。檀。亀山

金剛草

一名狼牙。○其葉獸の牙のごゝ。花の後。小豆の莢のごゝくして中ニ実あり。根甚だつよくして牛馬を。ほぐし。

俳　ゆつゝ。ゆゝ。乙田。

白粉花

夕錦。此花駿州ハ野徑ニ一面ニ満ち咲。春苗と生ず。冬枯る。葉雞頭のごゝ。花丁子ニ似ゝ。大抵赤。其外様々あり。実ニ白粉あり。夕ニ開き朝ニ萎む。高サ二三尺。

俳　ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

狂　赤。赤。赤。月。月。の。中。に。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

花紫 紫艸の夏なり。○若紫は春なり 花紫は秋なり 御傘より出 又若紫春へ花は秋なり 連哥産衣より出 其外俳諧に紫艸と花紫といいて春とす然秋なり 若紫といいて春とす然しも今世間にある紫の花は二月ふもあらず八月ふもあらず四五月より咲なり○雜談抄ふも紫艸と春秋二度に用ゆること決談しがたしや若紫は春月の嫩苗にそといいつ

哥 吉今ふの一ふしゆへ武蔵の、くさいはなるうゑ衣はこそそるる

烏頭 葉艾に似て厚し花の色紫にして形は烏兜に似て肉は名づく茎物は烏頭と云根なり

草烏頭 花葉象大抵川烏

頭は類して藥力はうすくして毒力はつよし 和州金剛山及所々より出る○椒花者流のとうびぶくろなるものの則この艸烏頭なり

俳 花咲は冬も一さいなる兜 竹夏

刈萱 萱麥 葉毎に五葉 莖相對して生る花は胡羅蔔又は景天草のごとし 初青く後黄なり 女郎花は似て枝葉たるのこと〻へ或説は刈萱は芒の類なり

紫苑 一名○紫菀○還魂草 ○夜牽牛○古哥よみ物の名はよくそ此うこゝろ

哥 吉今 ふるさとへていさ忘れ蔦の葉のこうこうとうつろひにける

○俊頼の抄は親の塚はうへうる故事あり物は子をこせぬくさうり即ち鬼のたりへいる

草なるゆへ鬼のもと草又ふみと
ふるもいふとかたるハ万葉なり
是のときのうた對なるゆへ
ひくわて名づけたるゝ此とく
大よ論あり　補遺出す
○謡曲大江山よ紫苑ていふ
やらん　ほのもとゝはは誰
がつゆ〳〵　名たるとあ

(能)　夕顔の花の色　呉

月草　(漢名)鴨跖草○花と碧
蟬花と云○俗よ露草
青花とも云○夜月の影ふさ
くとゝ久〳〵咲くゆへ
百夜草とも云花の汁と紙
ようも染るよ故ようつ花
ともいひて近江国よ專つくると
女の職とす昔此花て衣とす
るる八月ふさの花をり衣色の
移りやすく恋哥多くよあり

万葉にたゝ竹よ衣かすとゝ詠るふ
ものてのほいうつろひやすも

(能)　よ花のひらふ松の月くうもの花
月ものや夜ふ咲く物いうつろ居諸

宇治花園　宇治ハ應神天皇
の離宮なりしと
后よ太子の御坐しなりて相
原日桁宮と申ス時の御園
なり是と兎道雅郎子ゝ申
奉るなり花園ハ多き中ハ萩を
專らとなるこ今の人も同〳〵

(哥)　新勅撰　慈鎮

着こゝ人のあるこ家をもん
ぜうう山の松の花巻

○此哥にても知へし〳〵○夔紬輪
糸切歯等よ宇治の関白の花
園とゝるい并り其故ハ臣下の
花園とその子孫とゝて慈
鎮和尚のよみそうう人色さ

俳　花笠の有はなを落葉哉　素行

園なる自慢へ細代る自羽

滋賀花園　近江大津より天智天皇の御墓の〳〵旧跡あり　寓遠

哥　新後拾遺

今もなほ花笠の色ぞ見えて名のみ残りし秋の花薄

薄穂

△尾花△花薄○初尾花○幡薄○晋月物天名

七八月長き茎と抽で穂となす是即ち花なり形獣の尾ふ似る故ふ尾花といふ

哥　古今　平貞文

人をいとふ秋の花薄花なれば名ふ出る秋にぞあるらし

夫木　人麿

秋の花入花のすゑ〳〵尾なれば いとしら妹がなびき〳〵に

玉葉　原薄　入道前太政大臣

秋山の禁はてしのむら薄夕風そよぐ

詞　まねく○なびく○秋風○尾花波なる○袂○袖まねく○なびく○尾花

枕○尾花かな○尾花かな○尾花の波乃

見合すべし

俳　初尾花風にしたがふ東巴

きつぬきに出て君花すゝき　蓮二

狂　招きよせてだらこそや秋のゆふ

孤の尾花なるらん　貞徳

海辺の薄

○まね草波の薄○まねとの薄

△夫木集ふ三種の薄ありて

鴨長明とみる哥あり左ふ記す

哥　日数経ていくしま寺の花薄

なりくゆくすゑ人まつらし　長明

白妙のまそ海の糸とかりて

新ふさかれる花のとゝろ　長明

花すゝき　八月の末より咲まさかいまゝ
ゆゑなきなのゆゑ深き　西行

○此三首の哥にて考へべし一首
ハ増穂なり一首ハ白さへそ色
白くなり一首ハ穎芳色なり
又十寸穂と云て尺に満る穂と
もいへる説もあり　ことべて中
頃より　右の哥のごゝく　説
出ていろく臆説あり　信
用しがたし足らずといへり

根地草　河原に多くあり初ハ
やハ蓼のごゝく長し
て葉五葉　茎葉とも　黄緑枝
の末ゝに花あり八月なり

穀精草　又一名つくも云一名
○竹筒草○鼓槌草
○春より生ずといへども花出
ざしハ分ずゝし　八月　太鼓
のごゝくなれど花とひゝく
葉ハ細長し

(俳)星芒や稿んと溝の天の川　素
里芒や秋よ一段花ハさそ　砂喜

紫穎實　一ふちりめん草と云
花ハ白ち實なり
穂とる　塩漬ゝ貯へ

(俳)ふる穂の紫ハ九一
とろくのくさ

黄蜀葵

葉ひゝ
ふ似なり

岐良　花黄色線に似て大ひなり
(俳)花ゆゑ何ふ事ぞ　ゆゑ　秋精霊

烟草花　(一名)烟花。たばこのこと
ハ世人よく知る所なり
(哥)あ方なとむ浦あれも烟草よ
人のあくねのもゝくそあれ　後水尾院

藍花　花赤紫して見るに足
藍汁ハ葉ようて
五六月に刈る物ゆゑ多く花
と見るゝ藍なまく種とる
為に残せ物に甚さかいく
(俳)一ゝくのゝとよゝて藍の花　月峯

蓼花

△蓼の穂。又穂蓼共いゝ紅白数品あり

△大蓼。毛蓼。大蓼。四季とも。花のある物あり　枝葉少し　ちいさく味ハ勝るとう　大蓼ハ五六尺小立のび幹も太く若い小児の拳ほど毛蓼ハ大蓼の節無毛あり

(哥) 万葉集

我宿の穂蓼を古幹つまじもよ
くふかみもそれ思ひ　作人

(狂) 蓼くむ今ハ出ものを刈られい
畑をく　働ふたやさんとう　穂音

蕎麥花

そべて稜〻云へり　斯のごく箱の内
の角といふ　世ふ紋如の角切
角といふ物い稜折敷くいふ物入
そべ〻云も実の三稜あり　名
付〻そ花白く少し莖の下赤

(一名) 。荍麦。烏麦。花麦。種ハ
七月花ハ八月刈ハ九月あり

(俳) 蕎麥ハ花ハ白く実ハ黒し　蕎麥の花ハ白く実ハ黒し

蕎麥故事

河漏

河漏津と云処　蕎麥ハ天下
第一ノ名物　因テ蕎麥ヲサシテ文人墨客ハ河漏と云ナリ

蘆花

△芦の穂　(一名) 蓬蕚。又葭ともいひ葦ともいひ
大小よりての名あり　くいふ
もろ〻種類あり　花ハ風
あつて雪のごく〻ちり地よ
つまりてハ絮のごく〻

(哥) 秋風ふ沒こうそ小雖波江の
あ一ハ穂うそ永も秋名重之

(俳) 芦の穂こ絮つかうや家の猫　素来

(詩) 芦花五字對句　同上

黄葉倒風雨　沢国幾千年
白花搖渚洲　漁村両三家

詩　昔花七字對句

一灘浩々花如雪　川ヒロキニアレハナユキノトクミユ

舞秋風　ニワンシウフウ　ハセニフカレフ

両岸蕭々葉帶風　ハウガンシヤウ〻ヨウ　マヲカ

迷夜月　ヤケツニ　月ノヒカリ

項羽草　花いがらんひのこくく　表紅裏黄

能　えむ馬の溝ふ　項羽草　待價

虞美人草　此花ひくく　李せ　定ヤうきうや

今案ふ此名出て口決　大和本草ふい名花譜及ひ國史

と引て四月花咲といふい今俗間美人草と云物ふ罌粟の変生の物と見えそう一名美人罌粟と花景。類說本草時珍が說い各美人蕉といひ決斷ちと然とも謠曲の項羽の文ふい露州迄て秋草の葉毎ふ影やるといふ一部の趣意秋

ふ美人草秋草ふ決ず今案の口決いふれらを以ている事べし謠曲の作意ふよれい本朝ふ於て美人草の名称とて不三百年ふ及ず依て是と概と秋ふ決して可ふべし

龍膽　龍膽古今集ふ出す　蘭膽　夔龍膽。二種あり花葉ふして皆其姿ふ似り野ふ後

和名　えんそう草　和名抄　たつのくち州　延喜式　わすれ草　ちはや州　くすふ　内上　いとさ草　能因集　やまひるる　字鏡

哥　古今集　物の名　友則

秋常の花ふ　ちくさ　ちるらんと　やさしかりしやさしかりしも

能　ひんまやさいさむ　きく　桐壺

玄參　又ごまぐさ。ごまけて草　ひるのうすば　一名山麻。野芝麻。能消草。数品胡麻ふ似う乗青

黄色と帯う花は此月枝毎に穂と生ど長さ六七寸肥る
ふ天ふもてる所ふうて小異
あり江戸の花はみの一つなる
まてうん跡は白のごとし故う
ひるの白つふの名あり

木賊刈　刈千して物とそぐ故砥艸と名づけ名くう

(哥)　夫木　仲正

とさうる弓ふの木賊ふうる
くれいつる秋は月

木賊刈るしくれ乃森こる秀天

茅萱　一萱刈　萱菅　萱菅　軒端○三秋の北二丁目出

茜堀　異名　茹蘆　(俳)　ふい名
ふ深るもは　茜塚　富天

苦参引　和名　ひり草の牛
の舌病○茎葉根と
ふふ茅用ふ乗い提ふ似うう
春生ど冬凋む花は黄白根は黄へ

(哥)　あれよるるさ田のあ茅ふ乗生
秋まのくもるるとうる小　西行

たらやく引　千振といつる物とうつ
葉ふてさ如く花
桔梗ふ似うう苗五六寸して一根ふ数
莖生ど然ども千振は秋白花あり

藥堀　此月茅草の根を堀
べ根実して気つは

(俳)　茅堀えい供ふ用きふ四木
秋の柄ふ朱てかくあるふ作文古

石榴實　一重なれい実と織ふ
千重なれい実ふ
皮の内蜂の巣ふくく膜と以
てこれと隔つ実い赤く人の歯
のごとく数甚さ多し　一つの内あつき
物数鬼子母神と祭るふこれと供
もるハ子多さ以てこうべ

妙薬　咽のかわるよう

(哥)　續後拾遺　物の名
百ふもてるかくさうう移ふ

ふくさ忘貝のこゝろにかゝる

俳 木ぬりはあをびちゃ柘榴は金流 いるゐれい我よを付柘榴うみ會山 きさとい名ちうくうう柘榴は亀山 秋陳切て今ひをゐ柘榴は乙由

狂 一ろく落み今そ行末よく 無なるはさくろゐうん 松室

詩 柘榴五字對 同上

低垂圓玉紫 西域移根至 天子賞玩來 千擘碎珠紅 南方釀酒來

詩 柘榴詞 鄭鮮

高枝重欲折 霜老折丹膚 試剖紫金椀 滿堆紅玉珠

高キ枝ハシケリテ折ントスル二秋ノカク霜ヲカサヌレバオノヅカラ赤キハダヘハワレテ金ノワシニ入テ三ハアカキ玉ヲヅタクニチタリ

銀杏實 花ハ二月ありギンナン 唐音入子と結ぶ甚

霜を経て熟爛を食する物ハ此仁なり○銀杏の仁二種あり三稜の物ハ雄木に二角の物ハ雌木に

俳 古家や子わらべ拾ふ銀杏の実 青由

狂 秋来れハ葉ハ金の色あらて 実ハ赤らもこんゆる銀杏 負室

茴香實 ウイキヤウ 俗名 ウイキヤウ 俳 国名ハ実の香ふるハ西文金

通草 異名 烏覆○蔔覆○ 木通のこゝろ 草ハ細き

孔通ず故ハ通草といふ実を以てこの月の季とす

蔓荔支 木名 苦瓜 異名 癩葡萄○錦荔支○蔓荔支ハ葉葡萄ハ似

七月比黄花をこゝく八月瓜を結ふ二すとう五すだかり

俳 苦瓜や無て注ぎ有と苦ハ不一

狂 青ゐ苦い瓜ーて 苦瓜 茶也

王瓜（一名）落鴨瓜。地瓜。新羅菖。なまだ。きつひ

の枕。蔓の中ふ多く生て蔓
ゆく葉馬蹄のごとく鬚あり五
六月花あり柘榴の花に似たり
白花あり瓜い柿蔕ほう少を
長し秋冬熟して赤し柿蔕熟
して黄あり中ふ子あり蟠鰐の
頭の如しよく似たり又和俗むも
び文のさまにも似たれば玉章の
名あり これを炒り又ハ醤油煮
ふして食ふ

（俳）ゆつるやなのまひとる移瓜　千子
夕栄や葉ばれ果ぬかすみ瓜　仙丸

（狂）孫ふ喰るにかすりはさもあれん
蔓よかすまの瓜いうるる　貞徳

種瓢　種おとびいもべて髮未
ふ実とむすふ物い野菜
の類い来春まく種とたいへんが
ふふくべいても茄子まく其俗

そ軒下或ハ火炉の上ふ吊て
乾きたるとひき種とるあり

（俳）又しそハ見異のごとく移ちくべ　秋江
蕪も赤ひあむやなるぬくべ　佳筑

眉兒豆　京大坂ふて隱元豆と
七月九月又三枝ともいふ　黄檗隱元始て
持渡りしといふ　江戸にてふら
豆といひ西国ふて籬豆といふ

（狂）隱元豆をむとそ豆とて焚るい
人のそんあるねこをあれ　吉越

菱取（異名）凌角。角のあり誤
てさかれハ手足ふ刺つく
あり故ふ菱。凌角ふてその名あ
り八九月採るハ生ふて食ふ

茸菌　茸ハ菌ハ形ハ如く
名て分るといへども皆
茸類の惣名ふて和名抄ふハ
くさひらけ菜蔬ふ按ずふ
茸の字ハ同じくさひらけ肉ふ
ても笠あるものをいひて岩茸

革茸　木くげの類なり。○菌の字は笠ある物とゝひて松菌ト
治椎菌の類く。○和名ときのこ
と称するゝ夫その木の下に生
ぜるゆゑしかいふ心なり椎の木
の下ふ椎なりて生ず榎の下ふ榎
なりて生ずる類なり
○菌い木菌あり　△土菌有生ず

松茸　松の氣とゝなりてその
下ふ生ずと人のゝく知
る処あり。○茯苓多き処い茸
なり　西国ふは茯苓多し

茸狩　なへて草類を狩といへ
ども先松茸を第一とす

俳　うへとり人そゝゝ○菌り　蓮二
たゞ松や云伏いくゝ松の枝衣タ

初蕈　秋山野の松樹有る
地ふ生ずと書なり

石茸　○石芝。表青く裏黑
く峯頭巖上ふ生ず

で嶮しき所ふ生ずる者多く
採る人番にのりて大木ふくり
ゆくり松ろうれて取るなり
ゝるあやうし

鼠蕈　漢名蘑菇蕈。○朽木
老樹の根ふ生じ出づ

針蕈

鼠蕈に似て
微し　数十
本並び生ずと針のゝ
俳　針茸や志ろ毛のゝ如　鹿松

榎蕈　△滑らかき　俳　かり茸
や見合の傘の秋の色　蒙

椋茸　椋の木ふ生ずる物とい
ふ形榎ふ同し

平茸　異名天花蕈。○山林の
湿地ふ生ず

兎口茸　湿地ふ多く生ず微
の表褐色端まで
ていそふ似ふ滑らかふ孔
あり略蜂の巣ゝ如し

△紅茸 漢名 紅菌 一名 朱蕈 和名 うどんこ茸 ○さて
ひけ○赤こけ○仕丁こけ○微赤色
大毒あり本艸に葛花菜 云も此類之

△萑茸 芦荻の中に生ずと
俳 おそく茸やおりの法 季君
の名ふさう
も色赤黒之

△革茸 又鹿茸と云へ秋野に生

△標藁蕈 公式の松に生ずる 俳 松の根に生ず 宗鼎
一法につゐて在所も去れども石理
ひんぬきるかへ去めちつ 烏貴

狂 一本に百程てゐる地をれそ
去めちつ茶の去めちつん 道喜

△舞茸 平茸に似ゝ
俳 舞ひ舞ひ面白き黒人
名ちうちう

△楓蕈 大楓子と云る木の上に
生ずるきのこれて食へ
い笑ふてやまぢといふ是毒の
あるうるく笑ひやめい死をる

△猪茸 △蛇茸 △天狗茸
△月夜茸○栗茸 △柳茸
つゐも秋生ずるものへおのく
毒あり食ふへうぢ其外種
類多し悉く去ずに違
あるべ又春夏冬にも生
ずる茸あり人つくい追て
補遺ようん

△松露 菌譜に麥蕈○沈壌
の中に生ずといふ
俳 五つ四つ邪ふを松茸の芭蕉
えるあるを見もの老ら松茸に李由
寓の常杖て拾ひせうろ孔鳥丘
狂 茸紫いあるとい玉ゝおさむけて
松の松茸のゝ生ずい似ず 中楠

○茸菌毒あると知る法
新茸下に文ゝ物 文ゝ茸の
夜光りある物○爛きて虫ゝ物

煮熟して人を照し影うつる物
○春夏蛇のうつる物○此うつる皆
人と殺さんとす慎むべし
○又塗物の上よくうつるかゆし

中稲

八九月刈はさむるを中稲
稲といふこれより早
きを早稲といふ

哥 曽丹集 はやる中稲のつゆも新殆
うちてもしらく穂さえ出ぬるもし

俳 かゆをかゆるを稲を中稲より貝之

粟稗引

五月七月の部小も出
ぬ今い両種もいて
晩種あり稗ふい稷黍の二種あり

俳 我門のさびしく稗畑蕎雪

貝割菜

菜の種を切て漸く二三よ
二葉の形貝とかるに似る
故ふいふく大根蕪も同時に

摘菜

小菜○二葉長ゝと初て
葉の形調ふとうつるを

間引菜

摘菜の少し長しなる
といふ種と多くうゆる
故長とる時間て引る故名づく

俳 ちるはいろいろの絵はいかふ蕪又
ろ引菜や山の緑の又はつり 可丈
菜畑よく分と入て間引る 冬花

注 ろ引菜の孫も菜も同じ地名
かるるるるるるるるるるるるる 隱士

中稜大根

九

やゝ長そ根の大き
さ筆ゝ油の如くなる

菜種蒔

是ハ蕪菁の種類
そこ所ゝのかゝふ
あゝ是と真菜といふ又油
ふ志ぼる物をゝ油菜もいふ

俳 春と買ふ大ひの根も家光
ゝ時ハ油志ぼるゝ菜種ゝ飛蜀

胡麻刈

一名 苷囊 ○此月
初の頃ゝ八稜ある
胡麻と菜と種る法のごとく
してうゑ苗と生ゞ茹

の根あるそうゝ蓼の
ようなり

種植

芥子蒔　大根

蒔　豌豆粟蒔

○かしら数種あり春
不老といふと第一すぐ白芥尤
佳なり○大根亦数種あり○
八月十五夜に種てまけば花実
も大ふよくいづれも八月種てよく
なり　三才図会に出そう

俳　けーきりに儀の路産ゑん　巾車

学案のいなり坊ゑや芥花　紹薫
大根ふるもとのたくはあけて花清白

生類

此部に八月一ヶ月
の生類をあつむ

燕歸

燕いのる○燕い春乃
社日に来る秋の社日
に帰るゝ本州網目に見えそう二
月の部に出せず爰に畧す○燕

とぐろい春なり本州に越燕
胡燕の二種あり越燕は常の
燕なり胡燕は和名阿蘭止里
とゝなりのいて俗に深山燕ゝ

詩　夫木　菓をとりて海ゝそらに藥
をれさん秋の風やうれしき

俳　いや燕行後の九の寺の夏　真
ほそう先住ふあふそかつゝん長水

方大い遠なり去ぬつくれ嶽星
地いくいそなえ法いそなめ　雪可

狂　燕の住る家も秋の日は
弘かりなひのかるをゝ　如来

詩　帰燕詞　崔道融

海燕頻來去　柳人獨辭溜
ツバメハ海ノ上ヲ春ト秋トニタビ〳〵イク
リキタリスルニノ燕ノスミカニナル我
ハイク年モコノ他国ニナガトウリウスルコトヨ
天邊又相送　腸斷故園秋
コトシモカノツバメガ空トラクカヘルヲ見ニハ
ラハタノタユルホト故郷ノ秋ノケシキガコイシイトヨ

△稲負鳥　諸家の傳説多し　詳しき事

つゝ鶺鴒　みて理ちゝ元来古今の三鳥の一にして極秘なれい哥ふいみゝうしゝかゝ尚六番しを追て補遺に出と

(哥)　夫木　家隆

秋の田の稲おふせるれてゝれゝも　木の葉りよりて家の浮んん

古今　忠岑

山田もる秋はうしはもく番わいなおふせるのなゝくをうう

一書に三島化用の哥とそ　赤人

風の秋秋の夕暮れる秋をそいるおふせるとゝをいいう

(俳)　芭蕉　おもとおふせるおゝ寂心

(狂)　むつしやうけそうぬ三名を何とゝもいなおふせう　貞木

△鶺鴒　異名　鶺渠　○鶺姑　和名　△ふいゝゝ　綺部抄

△石たゝきす　同州　△ふくをゝう　和名抄　△とゝぎすゝ　日本紀私記　△とゝぎす

ゝゝおびる　同上　△たゝおゝせる　八雲抄　○日本紀神代巻いさなぎ　いざ

なゝの二神始て夫婦の事を行ひ給ひる時鶺鴒庭に来りて首尾をたゝくを見てさとりしゝいとゝぎすゝ鳥の名

ゝれゝり其外異名も皆尾をたゝくゝとゝりていゝ

(哥)　夫木　寂蓮

ゝゝなゝゝおゝる世のゝゝゝゝれ　さゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

(俳)　芭蕉　ゝゝゝゝゝゝゝゝ怨昊の尾をたゝくゝゝゝゝゝゝゝ

(狂)　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

して多し故ふ此月の景物とも云て鳥と云一等のこゝろ
寒を恐れて北より渡つて来る
えうといふあるを秋の草木
くもふ実をむすび熟を故
是を拾食ゝてむき飛ぶ中ひも
異国より大洋を渡り来物多し
能　かいふの前めくるや波りを芭蕉
一ひれの川へ入り流るる扇市
波りを云ひてそのあるを弘蕉村

朝鳥渡　雁鴨　のかゝる
らを朝ゝく山の尾
と越えきゝるといふ尾越の鳴を九月越しるを
哥　万葉　あゝこゝろて岩ゝ松ゝ
わしるゝ坂を朔越しして下暮
能　朔ゝを波ゝふ波ゝの一朔引芭蕉

小鳥渡　秋の色々の小鳥渡ると
ゝ口の渡鳥と也ゝ
哥　雲ゝを見ゝ色ふ小ゝ波ゝふい
何ゝ波ゝの浦の小ゝ雲ゝ　実房

色鳥　是も色そのうつりき
小鳥の渡ると云　御傘出

鶸

雀より小し全体黄
色そ彼ひい色ひい
茶ゝぐいろい此鳥のいろくと
こし青と帯て頭脊黒色く
其声潮滑うしてよく囀る
ヒュン　チュンといへがごと　種類　河原
ひい○唐ひい○紅ひい○蓼ひい
哥　山家集　声せまいろこゝろとゝ
ゝ柳のめゝむひいのゆゝ
能　山吹の　子もいゝ鶸の名夫流

山雀　○山陵鳥○开わゝ
似て好んで胡桃と食ゝ
能囀つて輪とゝる　雲草又いゝ
ゝとかゝて角置い孫ゝこゝろとする
哥　新六帖　山ゝ松ゝ寺ゝ山ゝふゝ
おゝ入ゝこゝろゝ多ゝ　光俊
能　山ゝふ陰ゝ夢つゝて引石素徳
ふゝゝ月ゝ巴て秋も入れ　早月

△小陵鳥○山雀に似て少さし

鵠

○小うゝえぐいゝハ此鳥あまたゝび集つたゝ合て鳴を故とを

哥 夫木 とゝかすかゝ小うゝぶとゝとゝも先

我ひとう秋の哀りとそ

山家集 やゝ〳〵ゝ友と松ふかゝ〳〵の

れゝ〳〵れゝあむ花のしゝとゝ

俳 川ゝあの押ゝてれる小雀ゝ秀

四十雀 △五十雀 小うゝふ似て大ゝう

○五十雀四十雀同鳥ゝう老て色と久也形のかゝうゝると五十雀と号く

日雀 四十雀ふ似て少ゝ頭脊赤色頬のゝう黒白まゝ〳〵る一書ふ緑鵠ゝかゝう

俳 淑ふ秋る竜田川ゝの日雀ゝか永奴

猿子鳥 三ゝ圖會ゝ

ゝてゝやゝを物も全体薄黒いろ胸腹うす赤尾の下ふ白ゝ処両端

ふあゝうゝれゝども哥ふ〳〵ゝハてゝう

ゝまゝてゝかゝゝて此鳥のゝゝゝゝさ

ゝかゝゝを鳴く良猿の子のごゝ

しゝとゝゝう哥ゝゝる

照猿子 蔵器拾遺曰突厥雀

そのかゝち雀のごゝ

そゝゝて身あゝう

照ゝゝゝゝ六位ゝ母の餌ゝ訓蒙ゝ恕知

哥 夫木 花の蕚ふ三ゝゝてゝほゝゝ

紅葉ゝかゝゝ木末ゝゝゝ多ゝ 第三学

頬赤鳥 雀ゝう小さゝ頬ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

高くゝてゝゝ

俳 三ゝ月ふ秋のほゝ孔雀 徒馬

畫眉鳥 鶯ゝう大ゝう 灰赤色眉白ゝゝゝ

ゝゝゝ頬白く声滑ゝふゝて誠

ゝゝゝ小鈴の音ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

て序鈴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おろかふ似て啼こえ毛冠とこと
(俳)ひとり多鶯の春を惜る心時信

瑠璃鳥　大さ雀のごとく文翠
蓑小翠蓑の一品かり

眼白鳥　(俳)ゑ蓑小雀のかつ　今石
あ一目白鳥

(狂)角力でも小さい力をもちいふ
去ればなほ小ふしそまる　東関

鵤　(一名)鸞鵲と飛んを多くむ
らなる鷹ようり小く色蒼白く
頭上の毛起る好んで草木の実
を食ふ○草木の種をへがこれ
物い其実を此鳥小食しゆ糞
の中より出る全き物をとりて
まけい植て生を拾ふこの鳥の性こ
ざりして常の紐よりはしさい
ゲとして逆さ方ふさがりそうけちの
ゆるをと待て飛ぶ是小依て小ふ
ゑ袋のごとしてゑるをう是
をひよどりあをといふ

(元)夫木このちふまこ後ゆ鵤を
ふなまこてもそれ色さこの邪

(俳)ひとりの小樹の金ちゆ鳥を鳴
鵤のこをやうこうて日和山遠三

島鵤　丸年異国ようり来る鵤
卵をこうこて育河

鵠　○魚猶本草出　魚虎鳥三代実録出
(一名)碧衣○釣魚翁○水翠
○金鳥○水邊の鶏ようる鳧
ありて魚をうかいとる雀ようり
とこ〜大ようり尾ゑどかく口
ぞ〜赤く大ようり腹足赤〜脚い
碧緑ふして尤美麗ようり
○神代巻曰天稚彦殯の鳴小
鵠と以て御食人とさしくいろ
是即魚と取る故小其役〜世感

(元)家とのむ家の格の鶏ようも
孔雀とし小家の川せ〜今異云
(俳)鵠て彩〜格ふ〜たるき　大蓼
川せ〜や二天ゑ家己ようり　芭蕉

翡翠　名　山翠。魚翠。鵠と同物なれども少し大

山谷ふかくして同じく魚をとる
都て赤色紫を帯て光あり

連雀

雀の大なるが如
頂に冠毛

雄のかたちは鶸ごとし。赤色
あり雌のかたちは黄色あり唐の雀なり
和名抄に出たり
○漢名に練鵲といひて音を
同じくすれども別なり
これを本朝にて尾長鳥と
いふ　三才図会に出る次に出る

俳　連雀や初出の枝に孔あり　百魚

尾長鳥　漢名　鳥鳳。紺碧色

脊に少し赤を帯ふ冠毛あり
目大にして眼青し其尾長さ
一尺半余なり　群飛して声日月星と云

俳　尾長鳥鬼瓦に居る　鬼瓦　晨

狂　ふるひ女に似たる尾を
振ふ山のとそ世に角屋

啄木鳥　一名　百木。斲木。地
古里。尚品類あり

大小あり小と小ゲラ
大と大ゲラといふ小は毛羽黒白
相交りて美なり雲雀の毛色
もあり足は黒く前へ二つ後へ
二つ出て拄杖のごとし又大なる
ものは鳩より小さくして惣身に
五色の彩色ありてうつ頭の
紅きもあるは是を山ゲラ
いへども啄ながら古釘の如
しくくと木をつきて虫を喰
ふ今はテラツキといふテラをケ
ラの轉じたるなるべしケラは木の轉

夫木　ふるたる木の根ふかうつきそ
あるすゑ虫をとるとてつきけん

能　あつきや雀行る家の彩畫
ちりぬるを柳やきてはきぬ

(狂) 赤き衣をきて紅葉の赤
木つきうくきつくきの名良新

(詩) 啄木鳥詞　王元之

淮南啄木大如鵲頭似仙鶴
堆丹沙　大サカラスホドアルガカレラハ
ツルニ似テ赤キ色ガウツタカイ　背長数寸勁如鉄
丁々乱鑿乾柏査　クチバシノ長サ一二寸モアリテ
鉄ノコトクコトクトレテカレタカレハノカラホヲ
ヲミタリニツヽク

△菊戴鳥　大サ目白ノヤウナリ頭ニ黄ナル花ノヤウ
なる物あり一書ニ戴勝鳥とあり
唐土にてはこれ花と花勝とい
ふ故ふかく名つけうるなり

(俳) 菓ノヤウニ見ヘシ　秋の秋　天雄

△椋鳥　形鳩ノヤウニ小ク頂白ク
脊灰色好んで椋の木
ふもとにあり大小あり京師加
茂のほとりに鳥いとゝ多し

(俳) 椋鳥の美なり
椋鳥のふ唐くわうあ山由

(狂) 叡山にはあるかなれのあきふ
くろのひくふまうすあるなる　文海

△来鳳　鵯ともかく〻ほめうう
○一説イカルガ也いうう

一名　青背鳥　○口ボヽ黄ふて毛
戴色あり甚奇麗なる鳥なり
米と食ふ殊ふつよくして人家ふ
飼て世話なり二羽同しく籠ふ
入るゝにいつくあり故一羽なくし
声甚清くしてヒチリコキといふなり
又月星となくもあり春夏多く
なれども秋の季ふ雌ハ色あ
しく養なふハなりがたし大豆
とあるれバ口の内そまうして皮
とうとうふなり

(三) 二条中納言定嘉ハ家歴々ハ高位なるそ
いるかよ豆ふ色とい注もそ
ひうくたくハ行をおくうん

△**獦子鳥**　雀より大きく黄黑色食して味よし　日本紀天武七年十二月臘子鳥薇矢西南より東北に飛と見えたり此外にも數千群飛して見る人怪異とする事まゝあり本朝國史和名抄等獦子鳥又獵子鳥の字を用ゆ其故まるべからず。和名抄うかむすかつこ飛ぶあり列卒ゞ山林に滿るゞ故に獵子といへり云く

(俳)花のはな雲と霞ふたりかな　来布

(狂)ゆくひとをそそのかしひとをるるのあとをれをちしろ　德音

△**鶲**　大サ雀の如し頭黑く白き彫あり霜ふりのごとし

△**鵐**　雀に似たり枕草紙ふみこゝろとして云是ゝ此鳥の目の外ふまるゝふちありもくて畠物の穴の緣を金物にて覆ひたるがごとしとゝ此鳥の目に似たれども尤種類異なり

△**蒿雀**　此鳥形鵐に似て色青く黄ゝ鵐と同物にて青鵐といふと畧してあをゞといふ又或説に鵐といふて別種なりといふ

(俳)月ふたつ邪まるゝ夜しかな　二

△**檀鳥**　好んでかれ木に住む形鳩ほどの小さく灰赤色眼のふち白色あり鶯二すなり諸鳥のうち真似び人の言ともなるふ気あり

(俳)かゝるふぞとゝる星はなめる　文全

△**額鳥**　ひたいとたく鳥へひたいの小し灰色青を帶ぶるく轉る二種照鵐あり頂に小紫點あり

(俳)めゝをやる井の上よりかとる羅文

△**伊須加鳥**　正字未詳ちちゝ上下ちひちがひる

鳥なり故に世俗諸事翻語
とぶいをとりと云又畧して
すゝもいひ又轉じてをとゝ
んといふこれを又轉して江戸
にてをとゝうんといふ
俳 いをとり名古屋の物を称ひ 鹿松

狂 石膏といふ所をそこなふ 角鹿
医師かいをとりをもつて治すと

初雁

八月初候ふ鴻雁来ると
礼記に見えたり此ころ
早く来る雁をいふなり哥にも
初て来る雁なりと九月に
初雁のこゑとある哥も有 八嶋
○元来雁の此頃南に来るとい
北の国は寒氣甚しく雪深く
餌なしと故に南の国へ来るな
(哥) 室治百首 初雁 信実
夏の秋の小井玉つさのこゑにも
今こそあれと雁いそぐなり
千首 近初雁 耕雲

寄あるなりやのよりに少し
いなえに出る初雁なり
(詞) 初雁のあり。今朝少こゑる。
今秋こゑを聞よりの雁
(俳) 初雁やひろひ芝の孫波山 音風
初雁や凡芝美なるこゑ 後行

雁

△雁音 △雁金 △こゑの雁
△こゑの雁 △かり △天津雁
○雁の〜 △雁の玉章
異名 雲侶○霜翰○蒼こと野
鵝といふ梵書にいへ僧婆くいふ
かりといふが音なりと云説あり
てをりにも詠て来たり。又万
葉集にかりは合いるをきゝと
詠どるとして是れ雁の名
そべ〜大抵四種の別なり
○真雁○白鷺 白雁かり

鴇

△野雁 異名 獨豹
○性多淫すして他鳥と交

八月 生類

鴻 菱食べるもの。雁の大なるを鴻と云りのあり

しきしく 少さくして羽毛も変ずるをべて鴻と同

家隆

(言) 夫木 くりうね

久かたの月のすまるもれぬ雲かくれ

ゆくそゆくすまる里四うづ

月をよ 月をよ 月をよ秋やさむき

那 夫木 かりみれ衣 重之

秋風やあらしへかくれん雁の

おとづれきくるもるれ師光

(詞) そらふかく。今そをを并てて

ふる。ふるとかりがり。もろふを

ぐる。おのうがり。けさくるう。

ひとつしるる。家綱。クけて来る。

数ふ来ん。名を秋ふ。かうそ又

来る。秋風の吹を待。秋風を空

ものつらこゆる八雁のそび時行列を

そろてあふ ゆくり

雁の玉章 くつるれ雁のつらこれ

みて来るれるくるうき

の歌 歌ろ故事 雁の使 これもそばが

の歌 ふるこを

泪 雁の泪 春を雁のなるこう

琴 雁とことぶ 舟 ながしゆく

衣 雁 雁 衣 源 あり ゆ 多

くよ 会せ ふる

(連) 雁もなけ 秋 八 八の 秋の声 家 祇

雲 ふ ふて かて す 秋風 ふる 肖 柏

雁 ものとふ 秋来ふ 紹 巴

(俳) そ 秋 ふ く 吉 雪 雁 更

雁の影 て 水 む 世 川 水 不二

(狂) こそ は ふ 雁 て 来 る 雁

羽風 ふ 寒 を ふ ふ 常 楽 菴

(詩) 雁五字對句 同上

忽聞涼雁至 下時波勢出

ナ ハ ズ カリ ノ ロ タ ル ラ ま ベ 雁 ガ オ リ テ 波 イ キ ヒ ラ ク リ

如報杜陵秋 起処陣形分

地 国 ノ タ リ ヲ キ ク ヤ ウ ノ 起 ガ ト テ 陣 ニ ナ イ ル ヒ ラ ベ

(詩) 全七字對句 詩礎

数声飄去和秋色 雁幾群

ス ウ セ イ ヒ ル カ リ サ ウ テ ワ ニ ト ウ ヨ ウ カ リ ク ン ン ン

ダ ン ン ト ス ル ト 恵 ハ ン ナ 秋 ノ 色 ニ ギ ル イ ン ク ラ ン ガ ニ ン

一字横來背晩暉　暮天飛

詩　聞雁　玲瓏窓

虹影侵堦驟雨餘　声々新

雁渡雲衢　二カアエンサキカノタンヤウ　二ニユル　二ハカアメノアトニ

コエ〳〵ノハツ〳〵ガ　彎弓欲射仍停手

只恐燕山有帛書　子ヲヒキテ此ノタイキト

タハモシ北国ノ燕山ハ軍ニ往ク人カ都ヘノ文ヲ此ノ二コトヅテクオコシタ　モアラカト思フユヘニヤ

雁之故事

雁四德　本艸綱目ニ云寒ル時ハ北ヨリ南ヘ行ソ

熱クナレハ南ヨリ北ヘカヘルハ信ナリ

飛ニ次第アリテ前ヨリ殿々鳴ツ

ルハ礼ナリ　偶ヲウシナフトキ余

ノ鳥ニ配セサルハ節ナリ　夜ム

レヤドリテ一羽ハソノアタリヲメ

グリテ守ル書ハ芦ヲ啣ヘテ矢

サキヲサクルハ智ナリ　已上ヲ雁

ノ四德トスルナリ

雁書　漢ノ世ニ蘇武胡國ヲ

征伐スル時大將トナリ

テ向ヒシニ軍破レテ匈奴

ノ虜トナリテ帰ルヿヲ得ズ然ニ

匈奴イツハリテ蘇武ヲ死シタリト

云ヒ其後和睦トノヒテモ蘇武

ヲ帰サズ漢ノ昭帝蘇武カ死セ

ズシテ匈奴ニトラハレ居ルヿヲ知リ

テ使ヲツカハシテイハシムルハ帝折

節ヿヲ射サシメ玉フニ其雁ノ足

ニ蘇武カ書ヲ結ビ付タレハ蘇

武ハ未ダ存命居ルナラン帰ス

ベシト申サセ玉ヘハ匈奴大ニ驚キ

蘇武ヲ帰セシトナリ　実ニ雁ニ文

ヲツケタルニアラズ漢ヨリハカ

リテ斯イハシメタルナリ

鷓鴣　昌塚の説ふれ春と

と貞德の説ハ秋

しきり渡ると来る時定まらず

小鳥の日本へきくるハいつまで秋

ゆへ此鳥も秋〻すゝる三月生類の部ふ委しく志るす

△鵐 日雀〻も〻く〻形四十雀ふ似て小に脊ハ灰赤色腰白

△鷦鷯 ○たくゝ鳥○巧婦鳥○狀黃雀ふ似〻

△鴟鴞 大さ兄鵰のごとく首眼猫ふ似て又老う兎ふ似〻

故未兎〻日本紀ふ見えたり

(排) 本草の説ふ柳ふ琴風

△鮭 正字鮭なり○大年魚といふ狀鱒ふ似て肥大なり二三尺四五尺細鱗あり○鮎と同く春江海の間ふ生して秋ふ至て河上ふ上る秋の末ふ黑烏と生て死とゝなり一年限のもの故ふ鮎と小年魚といひ鮭を大年魚といふなり奥羽の間ふ多し衣川武隅名取川等の物上品〻

(排) 水上ハ天拾なるゝ鮭の説ハ藩山

(引) きのふたちはなさてこれハ衣川をもとめてさけのわらん

△鮞 鮭の子なり二胞あり胞中数千粒ありて大さ南天の実のごとし又筋子丼子と云物なり

(排) はらこ又ハ松樹ふかゝ鯉子毋花東西

(注) えゝ〻ふらごゝいふ物なれども それハ釈伽如来ハ種の子 若狭

加志加魚 △かゝ鄙の説々紛々〻て未だ一定せず

ハもゝなり是ハ山川ふすむ魚の○ぎゞ○いゝビ○ごゝと○ぶゝ○かまつゝ○ぎゝ〻と川の中ふ声あり鹿ふ比して

かゝるゝいろ必一物ふあらずず諸々方言も有なり又一種春季とするかゝむゝ井手の魚ハ魚ふあゝゞ

此説藤堂樂庵初て云出しなり

かくぶゝハ杜夫魚なりか

まつかハかぜ川すそいとう 和州そのこれと石かとをとしく
不分明
(俳)偽りて雨仰桶迄かゝ 懐書

△江鮭 本艸 鮭○草魚○鱒と見えたり 大和本艸ふ 謄

魚こかけり○状鮭ふ同一湖中ふ生をる物名と異して形少小迄
(俳)あゝ奥合ふ幸後の宿ふ 六成
白鮭の名井よやらあゝ奥 夏度
(狂)とををそかまこ敷の夏ふ紙
ふうふうふ人事夏の里 行理

△太刀魚 形うすく長く銀箔の光あり太刀の白刃
ふとく似たり故ふ太刀魚しいへ
(俳)太刀魚や今も八条ひるゝ殺
三尺の太刀魚光るを和歌ふ 萬抄
(狂)太刀魚と合ってとれいてとれか
太刀うといさのこまをてるるれも
やつこまいつこあてるあろ不知著

△落鮎 △鏘鮎 正字鰷 本草 ○年魚 和名抄

○夫鰷い正二月の頃江海の間ふ生し次第ふ河上ふ登る石間の瀑布何程水勢こゞしくとも凌ぎてのぼり夏の頃漸肥て味美く中秋尤長大まして尺に及ふ此時草間ふ子を生して後漸く衰ふ故ふ流ふ下ふ遡ること能はず水ふ隨ひ下ふ流れ落鮎といふ此後全鰷ふ黒斑の点を生ずこれをさびしいふ
(号)玉ゆや嵯峨の鮎の川柳
乃紫ようちる秋風そうく 寒隆
(俳)さび鮎やもふふ山で光るを 千
嵯峨あゆやあ鮎くそしけりう 薫
(狂)たうとさいのこはあふこい鮎の
おちの末のあるも秋うふ 国長

△下梁 梁い奥とをる具こ川の両岸より石堰中を一文

計明て水を下し其処へ竹の簀を斜に掛さし置て水に簀を潜りて流る魚を水勢にたゞひて簀の上へ躍り上る所を

(三)夫木　いくしほぞや世ふる川の下いかかるこゝろ月なみをぞ見

崩梁　秋涼しくなり魚の下てにして魚梁も河水に流へ(九)

ま崩れ次第にしてそこかしこ

(俳)崩梁　梁の川の乱れ崩れ当日

蛇穴入　俗に曰春の彼岸に出て秋の彼岸に入る云

月令に蟄虫坏戸といふ諸虫皆かくれ入て然るに蛇は穴塞

るゝ能わざる多分鼠の穴に蟄を其蟄を時土を含んで穴

に入春穴を出るに此土を吐く是

石と化をへられと蛇黄とつくく

必用

此部に八月一ケ月の要用の事を記す

破軍向方

夜五ツ酉ノ方	夜九ツ亥ノ方	夜四ツ戌ノ方	夜八ツ子ノ方
夜七ツ丑ノ方	朝六ツ寅ノ方	朝五ツ卯ノ方	昼四ツ辰ノ方
昼九ツ巳ノ方	暮六ツ申ノ方	昼七ツ未ノ方	昼八ツ午ノ方

日刻　酉の日酉の刻申の日申の刻事とる事に用ゆべし月建

出行作事　東北の方へ向ひゆくは今月天道

東北へゆく或い普請又い土とるこ事とるにも東北の方とはとするこ

樂事　月の逍遥虫の夜遊い

さらにいと暑き消

ちるぞそれまでしこ風袖ふるし

草に玉ちる暁の露木にい白ひ

とゝるかへを夕暮のたのこ野の

山の花錦とまさて籬庭に色

鳥のつるとあるそひとぐで無
と儲ふさるこゝ〻〻

占候 此月外の日庚の日三つ
あれば米麥よし。虹あ
る時春ふるこゝろ米の價大ふ貴
し秋分の後霜多くれば病あり

天氣 此月日和のうるこし早
くして見さるべし〻〻月
うり暴風折々おこるこゝあり
海上慎むべし〻〻○雲い西より行
と日和こゝ北より南へ行と雨
こゝ○水こゝ雲い雨こゝ然
こゝも初めふ雲こゝありて散ぜん
こゝる水こゝい日和こゝり○赤き
雲こゝい災あり○紫の雲こゝ
てい大風こゝ戌亥ふ雲あれい風
生ずるこゝ此月陽氣こゝふのゞ
こゝふこゝり極めて風も高くあり
大風こゝこゝあり○西風と日和
こゝ南へよりても北へよりても
日和は○北風い雨こゝり夜分ふ吹い
夜北より と称して日和こゝ

衣服 帽子と着こゝ合こゝ
袖ふひい色こゝりて

時色 **萩經書** 竪書線 横書
こゝり裏こゝ

二藍 紅花と青
花こゝ深る **蘭** 表裏と
ふ紫

葱衣 表薄こゝ裏青或い
此草にてこゝりもすべし

女衣服 八月朝日こゝり十五日こゝ
ハかひい移りかゝる○これ
こゝるのこゝすやう○ゆ **薄** こゝ
こゝれのこゝれやう

龍膽 かこゝれこゝふ
こゝすき 白こゝひ 同じこゝく又
もみぢこゝるこゝあり
○八月十五日こゝり九月八日こゝい
綿つまめこゝしの衣こゝりこゝれ
こゝ色白こゝ薬こゝち移りこゝ倍

養生

素問曰脈は秋を主る 熱逆する事を苦し む苦くして食べて是を下すべし 亦酸くして是を收め むべしとて此月は涼氣来りて人多く風を感じて病をむき慎べし風とさく風とこの月多く生冷の物を食べからず

○白露の節後は毎日丑寅の時両手をとりて正しく坐し膝をゆるし首を左右にめぐらして両手をも左右にめぐらし各三五度歯を叩き内ふ吐して液を呑み又しかくのごとくして腰脊の経絡風の滞り狂癇癱等の症を去るべし尚委しく歳時記に出す

月のこと多ふるの苗を踏むべからず

其外此月用意の品歳時記に委しく出をゆへ略す

飲食

此部は人力をもつて造りたる食物をあつむ

鯽 鯽の二すなわち鯽と塩とを

鯽 東都及び関東筋にて生の鯽の三寸已下なるものをひしこと称へ四五寸なるものをいうとかいう

能 冷しと大豆ふかいを能る 大流

狂 小いりにして出て去るもかしきは笑ふをあるいは乳母月

いつ味くはゆる秘傳

いつ味小なるものと頭をとりて梅酢に一日ひつつ引上げ其後三度ふ半日ひつつ引上げ鉢にそ梅を入れ漬けゆくべし 散やわらかふしてあぢわひ美なり

○さて贈い身とさき散と去て生ふて酢或い味噌に調味をなをい 鱠肉をそこれとかくこと

鱗黒漬　豫州の産、鱗を切り去て塩水に和す

新酒　○あらき酒も云又早く出る故△新走とも云

酒は唐土夏の世より初る日本にては應神天皇の御時よりうるはしきかうくわい

博物筌に出てそう

俳　松風に新酒と碎を山路に進ニ堂嶽して早うあやうき新酒百史

狂　酔ふはいんのうたふをきくめるは世のふうとはさもあるまし　不一

涪　酒の熟していまだ去ざるきく汁滓交るをいふ

中汲　酒のもろみを漉して清ざるを色白酒のごとし酒ともろみの間ゆへ中汲といふ味常の酒よりまろくして美なり

醂醸漉　是は唐土の名く酒黄色ふかくうるといふ

酒異名

聖人　色清味美賢人色金の味ゆゑ苦く○愚人色くろく酸と云○小人の愚去天中記出

杯中物　李白詩出○羅浮春　東坡詩出○忘憂物　同上○玉醴　十洲記出○釣詩鈎　東坡詩出

掃憂帚　同上○麦生　開元傳信記出○玉液　事物異名○芳醞　同上○清醴　周礼出○美禄　漢書出

堯酒　白氏文集出○社康　事物異名出○破悶

將軍　同上○瑞露　東坡詩出○葡萄酒　三輔決録

狂茶　天中記出○歡伯　易林出○竹葉　孟浩然詩

流霞　詩学大成出

和名　ゑひごろも　万葉

竹の葉　夫木出　みき　日本紀出

酒種類

醥　あまき酒　正月ふかして八月ふる○是○醨　すまし酒○醴　ひとよ酒○醍　いうあん酒　醍　いうろう酒

醪　むきさけのくもつれのむさけ

○日本酒の種類いろいろあり
出る時節ふゝ四季の内ふ出を

(哥)万葉　ひーゃと　大伴旅人卿

酒の名を聞くにしるしるしるしいにしへの
賢しき人の言ひけるごとの酒の名を
聞くにしるしるしいにしへの賢しき
人の言ひけるごとの酒の名を　仝

あをによしなら山ふ咲く花の
にほひのごとく今さかりなり　仝

酒の名を聞くにしるしるしるしいにしへの
賢しき人の言ひけるごとの酒の名を　隆季

朝ゆくてさくらの花をけのごとく
いそゝとそれと思ひて白き俊頼

あちさゐの花の色の変りゆくを
秋のゆくとぞ思ひ出づる　長屋王

あをによしつゝる酒家の酒つゝみて
家あるゝ人の秋のさびしさ　後京極

(俳)風原もゆゝ酒の名を醸ゝる　天雄
ゆゝ酒の名は酒の徳と称ふ　片久

太の名ゝゝは酒ゝゝゝゝゝ　文全

(狂)かゝゝる酒のちゝゝゝゝゝゝの
神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　行安

酒のみゝとのさゝゝとあり　貪道

(詩)酒五字對句

色笑榴花重　光浮蘭葉翠
サケノイロハザクロノハナヨリヨク　サケノヒカリハランノハノアライイロヲウカベ

香兼竹葉醇　色滑鱗金黄
サケノ香ハタケノハトヒトシニカウバシイ　サケノイロハウロコノキイロナラカツタヤウナ

(詩)酒七字對句

詩礎

暁日着顔紅有暈　喧疎漏
アケヒカケガカホニウツリクヤウテホンノリトアカク　カマビスシイモノヲタヅネ

春風入髄散無声　咽暗氷
シユンプウイノズイニサンスレコエハルカサガ身ニシムヤウデカダダウチヘヨヒガヤハツテサムウナイ　ノドアンヒヤツニコホリニムセブ水ノアトタウニキエル

(詩)酒之詞　林和靖

温如春色爽如秋一榼樽前
ヌクトクヒヨリノヤウニサワヤカニシウ

自獻酬
ミヅカラ酒ヲノムハカラダノアタヘニハ春ノヤウナリ気ナサヤ

カナヘハアキヤウチニヨツテヒトツノサカヅキヲモツテタルノミデヒトリサイタリ大サヘタリシテ百万愁魔降不得故應用爾作戈矛

カズくノウレヘヲタイワ〻く酒ノカフ新トレテ多ノ碧香瞻ヒヘヲオヒミリヅケルナリ

月能遮冷破暑還須百餞掌

碧香ナドハ云メイシヒフメバウ月ニモヨク寒キヲフセギヌシヨノレブンニハ百パイモノンデアタ好比阿房無限勝大寒

大熱此中藏

コヲタノレミヲアバウ宮ニクラベテ夏レハヨツホドハサツテアルヒ百ハ大タモ大分モヨサメバトトウスルユヘヤ

酒樹

頗遜国ニ樹アリ石榴ニ似タリ其花ノ汁ヲ採テ瓶ノ中ニ停レハ数日ニシテ酒トナル味ハナハタ美ナリ

顧建康

顧憲之ト云人政ヲナシテ甚人和ヲ得タリ故ニ人々味アツク旨キ酒ヲ顧建康ト号ク其清クシテ且美ナルヲ云

八月飲食並料理献立

禁物

生姜八九月食ハ毒ノ部ハ委シクハ九月ノ部ニアルヲ

○茄子秋の後多く食ベテ目ト損ズ○鳥羊小児ニ宜シカラズ

好物

鬼肉今月より十月まで食ベベシ他月ハ宜シカラズ

料理

汁

付論ハ九月ニ

清汁

膾

肴

飯

菜

漬物

酒

肴

飯

菜

漬物

酒

差味

鯉 細づくり 夏さしみ

あの白しらこ えびがら
ひうぐいさん いりぬか
ちらしび いりぬか

たち魚 たちこん きくらげ えんどう

生さけ 松たけ ごぼう 芋 いりぬか ゆずかわ

生鰹 つまり 芋 かつのこ ごぼう ごまとこを
ちりれん 芋 ゆずかわ

煮物

鴨 松たけ ごぼう

はも 蒸 ふまこと
松たけ・ぎんなん
きくらげ・こせう

たこ ちんぷら
松たけ・ぎんなん
ちりぜうが

生えび 牛蒡
出たけ
ちりぜうが

たこ ちりぎ
あるびぜん
ごぼう

焼ちうず
ごぼう
のり

小ちうず
ぬかぶう
ゆ

鴨・孫ぎ
たうん
ちりぜんちう

和會物

あへもの
あへ ちりぎ
はしら
ぜんちう

ふしぎ
松たけ・ゆず
ぎんなん

あさり
ちり・ぜうが
たでのあへ

生ちいたけ
むきぐり
ぎんなん

みぞれさい
ちりあへ

たたこぶし
松たけ むし
ぜうが

吸物

ちりぎの
たたこぶし
ちりぎ 小たけ

鮒 やきて
ちりぎ
ちりぜんちう

精進

汁

竹輪 ふ
焼ちうず
ぎんなん ゆ

出ちたけ
やたがらふ
小えび

かまぼこ ちりぎ
ぎいとこ ちりぎ

長いも たん天
小えび ちりぎ
えんどう

かもうり
ちうず
さんしょ 花

膾

青色 ちえ
ちりぎ
きくらげ

松たけ
たうん
ぜんちう

ひらご
うど
めうど

ちりぎ
きくらげ
たうん
ぜんちう

うんまやく うど
ちいたけ・のり
ちり・ちりぎ

ぜんまい
ゆず・ぜうが
ちりぎ

たこん
ぜんちう

あげぜうめ うど
ぜうがのいも ちり
きくらげ

かや 青
あげ ちりぎ
松たけ・みかん

清汁

ちりぎ
しそのは

ひらご
ちり 花
ぜんちう

清きのうちえ
こせう北松

うみそうろん
つまこんぶ地のこまる

差味

かんてん・こまこび
うちくいうざり

松うけ・ふきふー
へそうけ・ごふうが
ゆ　いろね

こうまいもせん
刺く孫んぷ
ひこ　いろね・ごまこび

煮物

こぼう小口切
やきごう
まくらげ
松かしやうる

あげふ・かんこん
ふここげ
かしこ孫こそ

ふかぐ・九条
ごやうせん
のうだん

ゆきたいも
こげ
かんごやう

松うけ　やたいも
やきこく　ぬ
うすこぶこ・そうやうぶ

和會物

青あへ

ゆきたいもうる
やきぐう
こやうこそ

ゆこ豆
ごねこんせう
あへ

ゆうがうけ小口
ゆうね
松肉あへ

塩たけのこ
こま
かしこあへ

時物

魚

ぶぶ。こう。まるがつお。
太刀魚。へ巳。きすこ。ひろこ。

鳥

うづら。はこ。ちだ。むく鳥
だん。ゆず。かる鴨。ふる